

第四

持統天皇道行

わりなしや、我涙さへ心さへ、身に任せねば天上の、五衰の花も散るとかや、いは  
 んや粟散邊士の境、十善天子もまゝならぬ、浮世と聞けど憂事の、かくとはいざやし  
 ろ妙の、雲井の餘所の旅枕、御痛はしや持統天皇、獄屋を遁れ出て給ひ、勿體なくも  
 玉體は、草の筵の起臥や、淺衣卷筆かひくしく、太刀脇挟み只二人、左右に供奉し  
 參らせて、今を初瀬の山越や、八汐の岡にこがれ行く、名所とも古跡とも、御涙に見  
 遣りたまはねば、慰め申す方とても、泣くばかりなる御有様、哀昔の春やあらぬ、南  
 殿の櫻に御心を傷しめ、御製のすさみ人々の、歌奉る筆の跡、伶倫舞樂の聲ならて、  
 耳にも觸れず目にも見ぬ、賤山樵の戯歌、野面の案山子風にゆらく、そよよくと  
 と招かば往かん、いざや旅路の談ひ山、それさへ跡に三輪が崎、布留の中道神並川、

岸の山吹咲亂れ、松に懸れる藤浪の、うら紫の色々も、花一時の世のならひ、風來つ  
 て香を奪ひ、月を詠ぜし夕には、雲起つて光を欠く、人間界の教ぞと、花に悟の菩提  
 山、衣鹿背山梅谷の、移香留めて妻木とる、里の童口々に、唄よしや世の中死んだ  
 がましかいの、生きて添はるゝ私や身てもなし、ナウコレなんとしよ、いとし男と隔  
 てゝ住めばの、鳥鳴くさへ私や氣にかゝる、ナウコレなんとしよ、鳥鳴く音も鐘の音  
 も、共に暮れぬと告げ渡り、雲紅に夕陽も、共に傾く笠置山、動の森も近ければ、  
 いかで笠置のいはやすく、寝る夜なくとも暫しとて、木蔭に佇み御座す、星さへ曇る  
 朧月、いとゞけはしき岨づたひ、道に折伏し横はる、松の鱗や枯木の角、龍を踏むか  
 と驚かれ、しばし休らふ巖の形、昔茫々と虎の背に、腰掛くるかと恐ろし、君は二  
 人をつくづく、と御覽あり、誠や天の高さ七萬八千九百四十里、地の厚さ五萬九千四十  
 九里と傳へたり、その中に住む日本の本の、男女の人の數、濱の眞砂にまされども、  
 朕一天の主として、従ふ者は其方衆只二人の外とては、空飛ぶ鳥も見返らず、斯程つ

れなき世の中に、頼母しくも身を捨て、憂をたすくるこゝろざし、この世の事とは思はれず、「昔五天竺の主、頻婆沙羅王の御子阿闍世太子は、過去生よりの悪人にて」御母韋提華夫人を、鐵の牢に押込め、無數の苦患を見せたまふ、釋尊大悲の光明を放ち、牢の内に來臨あり、かりに西方淨土を現じ示し給へば、則ち安樂往生の悲願を念じ、夫人は牢屋の苦を、忽ち遁れたまふとかや、今春彦の尊、母を牢舎と爲したるは、昔の阿闍世太子とも、肩を列べし惡逆なり、それは西天佛在世、是は日本人の世に、牢を助けし方々は、朕が爲の釋尊ぞやと、忝くも天皇は、御掌を合はさせ給ひければ、こは恐れ有り冥加なや、御運目出度くましまさば、かゝるわりなき勅諭を、蠅同前の我々が耳に觸れうか勿體なやと、二人は頭を地につけて、悲歎の涙せきあへず、重て宣旨有りけるは、「たとへ如何に成行くとも、三人一所と思へども、返すくも覺束なきは、夏仁親王の行末ぞや」二人の内一人是より別れ、親王の先途を知らせよかしと宣へば、「仰なくとも申上げんと存せし所、なう卷筆殿、御身一つも若役に、

直に君の御供して、我等が故郷、天の香久山まで落付きたまへ」この淺衣は是より別れ、命限りに親王様に、廻りあひまゐらせ、日出たき御左右申すべし、早お暇と申上ぐれば、「いや是いづれとても御奉公、若役の姉のとして、年詮索の入るべきか、殊に君を安穩に、奪出だせしも御身といひ、行先は故郷、彼是もつて、御身御供せいで叶はぬ人、この卷筆が是より別れ、親王様を尋ね奉り」その序には連合の御兄弟、互に武士の意地ある中、殊に父御の御勘當、痛はしや鞠の御會の最期の門出、不便さゆゑの勘當、子故に捨つる命ぞと、亡き跡に知らせて情なき親の勘當と、恨みさするな嫁御達と、涙と共に一言は、泰山より猶重く、千尋の海より猶深し、それ故に「お首の肉を清め鬮となし、是のごとく身を離さず持つ事も」御兄弟に廻逢ひ、この鬮體のお前にて、勘當御免を言渡し、冥土の闇路を晴し、御兄弟の悦びの、顔も見たさの念願力、奪取つた舅の首、布引一家が忠節を、哀れとも不便とも、寂慮にかけてお暇と、涙に暮れて奏しける、天皇もや、御涙、この上は卷筆が、望みの心に任すべし、

「扱又みづから祈禱の爲、天帝に願をかけ、一首の歌の上の句ばかり詠置いて、願成就のその時に、又下の句を詠添へて」三十一字に聯立てんと立願し、詠ぜし歌の上の句は、春過ぎて夏來にけらし白妙の、妙なる神の恵にて、歌も願も成就し、いづれも廻り逢ふべきぞ、さらばくと御供に、淺衣も淺からぬ、名残をこめて別るれば、巻筆は見送りて、心深き御歌や、春過ぎてとは惡逆の、春彦過ぎて夏仁の、夏來にけらし夏木立、早御姿はかくせども、残るはさらばくの聲、御に續く郭公、鳥も冥土の別とは、後に知られて三重あはれなり、三人連れても淋しきに、空さへ濁みて更くる夜の、月を向うに更けたれば、連には成らて我影も、後よわしや心細、淋しさ凌ぐ小笹原、踏分くる足音して、「是々女中、何方を指して行く人ぞ、連れに成つて遣らうと、呼掛けられて振返れば」苧殻頭巾ひつこうて、大獵刀指しこはらし、六尺餘の棒の先、大熊手すげてかたげしは、鬼といふ物是ならん、ぞつとせしを然あらぬ顔、「過分なれど男連、頼む女子ぢやない、構はず先へ通つてと、身構して立ち寄れば、それな

らサア帯解いて、さいた物も着た物も、肌につけた路銀もありだけ渡して、赤裸に成つて往け、遅なはるところりやこの熊手、天窗の鉢へ打立て、引摺倒し剝いて取る」こりやくとと振廻す、「巻筆打笑ひ、ア、おどすまいく、この山中の夜道を、獨歩く女子ぢやもの、手に覺え有るまいか、命繋ぐ爲の山賊が、命捨て、詮ない事、歸りやくとと太刀ひねくる、是女郎、渡世の爲の山賊こそ命も惜め、大事のお主を養ふ、慈悲も知る哀も知る、善惡も知つたれど、お主には代られぬ、さつぱりと脱ぐか、踏みめして剝がうか」但する氣なら打つて來い、首がとんと落ちるまで、剝がねばおかぬ、サアどうぢや、サア脱ぐかとのさばつて突立つたり、「巻筆思案し、ム、僞にも主人の爲と有るからは、聞捨にもなりがたい、上着一重脱いで遣る」取つて歸れといふより早く、熊手取延べしやに構へ、「古溫袍の一つなど、蜀江の錦では有るまじ、何にせう望みあるは腰の物」何も彼も引剝くと、八相に振つてひらめかす、熊手を切つて拂ふ太刀、鐔目に成つても天皇の、御名を大事と我名も言はず、萬九も同じく親王

の、御名を包んで我名も言はず、女心の一筋氣、萬九が一途の百姓氣質、忠義々々と一偏に、思ひすごしぞ是非もなき、難なく太刀を打落し、熊手を逆手に叩伏せ、叩伏せられたよたと、たわむ柳の腰骨を、しつかと押へて動かせず、エ、「無念な歴々の侍にもひけを取らぬ此女、運が盡きて是非もない、我も名ある武士の妻、もう斯うなつては、助けてくれない生きて居ぬ」せめての情に腹を切らせて剝いてくれと、叫ぶところを引起し、「否着る物に血をつける事はならぬと」吭に兩手を掛け、力に任せ締殺せば、息もぎらぐら目には白黒、手足を屈め苦しむは、譬へんかたもなつの虫、火に焦るゝが如くにて、あへなく息は絶えにけり、帯ぐるゝと引解き、かひぐしげに打返し引返し、上着の小袖剥ぎとれば、肌着ばかりの死姿、萬九小首を傾けて、さめぐと泣出し、「ア、貧乏は爲まい物、御主一人を養ふにも、賭博は知らず盗は得爲ず、意趣意恨もない人を、むごたらしい事して退けた、地體殺生嫌で、蚤さへろくに殺さず、しかも母に離れて百ヶ日立つや立たず、この様な殺生して、念佛申した精

進した、何したとて何の届かうぞ」母の地獄の手引ぢやと、聞人なければ聲を上げ、思ふありだけ身の上を、口説き立てゝぞ歎きける、肌着なりともその儘で、冥土へ着て往て下されと、熊手取延べ土掘返し、犬狼の荒さぬ爲と、やらやく體を取りをさめ、油單包太刀小袖、懷中まはり搔集め、墓に向ひ念佛し、この回向を引導にて、佛に成つて下されや、是はこの引導のお布施の爲、萬九和尚がもらひますと、泣くゝ山路を三重行水の、流を止めて布引の、淀次郎照房は、兄弟の了簡違ひ、父が勘氣に身をひそめ、親王の御在所、尋ね廻るも世を忍び、或時は一葉に棹さして、袂を南浦の雲に片敷き、或時は蹇驢に鞭打つて、衣を西山の雨に濡し、露には袖も干すやとて、森の木ノ葉に宿からん、笠置の窟に着きにけり、人家ありとも覺えぬに、一叢繁る小竹の奥、燈の音の聞ゆるは、ヤア重疊の泊と、内をそつとさし覗けば、折しも長歌が行燈の陰に、抹香を盛りて見る人ありとも知らず、咽ぶ硫黄の花盛、戀もさかりの顔容は、みすゝ情ありげなり、何ても是にじやれかけなば、宿借しさうな物なりと、松

の板戸押明け、ちと御免なりませと内に入れば、ハアどなた様ぢや、「ついに顔も見知らず夜に入つてこの奥山へ、何の御用でござんすぞ、如何にも見知らない筈、我等とても不案内、この麓より川舟にて、山崎まで下る者、日暮れたりして船出さず、筈の下に寝て見ても、乗合は年寄ばつかり、私は悪い癖で、田烏子と婆とが嫌ひて、美しい女中の傍でなければ、つんと夜の目がねられず」とぼく／＼參る所、この様な仕合せ、一夜御無心申しますと、つくと上つて、ア、是は辛苦なこと、手傳ひして進ぜましょ、我等大名人、抹香も盛りまする、物相も盛りまする」お前の御意なら、簀でも荷ひませうと寄添へば、長歌さすがふつ／＼かにもあしらはず、目利が違うた、旅籠屋でないぞえ、爰の主人は私が兄様、この山の獵師、毎夜獵に出てられ、戻は夜半か曉か、宵の中で有らうやら、その夜／＼の仕合次第、兄の心が計られぬ、更けぬ中にわきへ往て、寝て下さんせと言ひければ、「さては獵師の妹御か、なう夢は争はれぬ、只今船中てとろ／＼と寝るとひとしく、ちやうどこなたの恰好な美しい娘が、我等が懐

へぐす／＼と這入らるゝ、是何者ぢや男の寐肌へ、狼藉千萬と咎められ、わしはこの山の獵師の妹ぢや、こなたの肌へ美事な黼を、一疋つけ込んだと、無理に入らうとめさるゝ、いや入れまい、いや入れうと、大汗になつて夢覺め、寢惚てこの仕合せ」サアほんに黼が有るか無いか吟味の爲、夢の半分見て仕舞をと、手を執ればひととして、わしや其様な夢見た事がないはいの、夫ならば初夢、ひらに見て御覽なされ、「唐土にては邯鄲の枕、この様な急な時には機轉の枕」文彌げにや廬生が寢し、榮耀な時は五十年、粟飯炊ぐ手間入らず、つい茶一服喫むうちに、見て仕舞ひますと抱きつけば、ヲ著くろしやとすりのきて、お侍の可笑しい事ばかり、よく／＼宿を借りたさうてお笑止な、兄が戻つて何といはれう知らねども、不自由堪忍遊ばして、夜さへ短き柵の下、是へところそはもてなしけれ、粗忽の御無心、御芳志とかう申されず、「麓にて支度致し、お茶も所望に候はず、山海の珍物より、木枕一つが御馳走、道に勞れ眠もくる、直に一睡御免あれ」兄御にもよい様にと、身を横窓の風防ぎ、せめて是をと、紅

梅裏の女の小袖、取出し裾にかくれば、ハテお構ひ成さるゝな、いや更けてはたんと冷えまする、その代に何時までも、蚊のないが御馳走、軒を隔てゝこの奥の、狭い藁屋に住む人あり、私も其處が寢臥の所、朝もゆるゝお休みと、隣の間にぞ入りける、照房くつゝと吹出だし、「我身にも恥しい、宿借るばかりの戯言、それ故曠着を貸したる、女の氣は優しいもの」さりながら、大事の公用かけたる照房、女の衣裳を身に觸るゝも本意にあらず、せめては是をさかさまに被て、心涼しく旅寢せうと、我妻の小袖とは、思ひも寄らず烏羽玉の、夜の衣を返しては、夢待顔の假枕とろりゝと寢入りける、遠寺の鐘を吹送くる、嵐の音に寢覺して、身を動かせば小袖の下、足に觸る女の肌、ムウ是ぞ彼の妹、宵の詞を實と思うてお見舞、この草臥に遠路抱へ、御馳走けつく迷惑と、寢返るふりにて踏出だし、踏出だしても猶離れず、枕側立て見れば佛の、姿の小袖引纏ひ、我妻の卷筆なり、ヤア女房かと言んとせしが、待て暫し、我寢惚れたる眼かと、本性正しくためらへば、なう淀次郎様、最う見忘れて下さるか、

これこなたの女房是卷筆と、幽霊の靈氣に心ほれゝと、何しに妻を見忘れんと、縫り付けばすがり合ひ、今更死せし人ぞとは、思ひ寄邊の水の泡、うたかた人も我が身も、夢に夢見る如くなり、「此所はたしか笠置の窟と覺えしが、御身は又何時の間に來りしぞ、先天皇の御上、父先生殿は恙なく御座か、覺束なしと有りければ」なうその事にこそ、二つの悦び、二つの憂ひ有るぞとよ、この事語り申さん爲、是はみづからが着馴し衣、さかさまに返して召すは魂結び、馴染重し下襲の、つま戀しさに參りたり、「まづ一つの悦びは、天皇様を嫂御が奪出し奉り、その身の古郷、天の香久山へお供ある、扱二つ目の悦びは、御兄弟の御勘當、御免有るとの御詞」次に二つの悲みを、一つ語るも涙ぞや、痛はしや父御様、我春彦の尊と刺しちがへ、悪人さへ亡ぶれば、天皇も親王も、共に助かり給ふべし、仕損じて殺さるゝとも我一人、勘當の子は咎めなしと、「子を思ふ餘の心の闇、兄弟に言ひ聞せ、恨を晴らせ二人の嫁と、是を紀念の御詞、直に鞠場に出てたまひ、御老體の悲しさは、大勢に取巻れ、終に尊の手にかゝ

り、丁七十の鞠の塊、懸りの「露と消えたまふと、語りもあへぬに淀次郎、それは實  
 かあさましや、ハア仕なしたりとばかりにて、絶入々々臥轉び、親を慕ふは嬰兒も、  
 同じ心に身を悶え、足摺してこそ歎きけれ、御歎きを見るにつけ、「今一つの憂を包ま  
 んとすれど包まれず、みづからも親と頼みし舅の首、敵の手には渡さじと、奪ひ取つ  
 て身を離さず、御兄弟に見せん爲、人々に引別れて、たつきも知らぬ山路に、一昨日  
 の夜半の比、山賊の手にかゝり、上の小袖と諸共に「はげしかれとは山嵐、あるにも  
 あらぬ憂身の果、その時の戀ひしさが、魂に凝固り、思ひ埋みし雪折竹、世はさかさ  
 まの御弔ひ、頼むも我夫心残るも我夫と、名残惜氣の目に涙、さらばといひて立ちけ  
 るを、待つてくれ今暫、何國へ行くぞ女房と、抱留めても力なき、身は空蟬の脱衣、  
 形は消えて俤も、空しき小袖ぞ残りける、なう巻筆、我妻なうと、裾を返し袂を振り、  
 尋ねても見えばこそ、南無三寶夢かと思へは、まさしく見馴れし小袖あり、現と言は  
 れに形はなし、扱は死んだに極つたと、初めて驚く悲みと、父が討たれし悲みと、二

つの愁身ひとつに、始め二つの悦びも、消ゆるばかりに掻きくれて、鬼を欺く照房も、  
 前後不覺に泣き居たる、ヤ、箇様の時に狼狽へては、野干の魅もあるものと「一心を  
 しつかと修め見廻せば、娘が言ひしに違はず、奥に離れて一構、隠居めいたる藁屋も  
 あり、この庵不相應の内の體、「ム、聞えた、我妻を殺し、剝いだる山賊の巢籠り」サ  
 ア今宵こそ山賊の巢下しと、小點頭して立つたる所に、万九郎例の大熊手、衣類結付  
 け振りかたげ、歸るを見つけ淀次郎、元の所に高枕、空軒して居たりけり、万九郎も  
 寐姿を、不思議さうに見廻し、是妹戻りました、妹々と呼聲に、おうと答へて立ち出  
 てて、兄様いかう早かつた、「仕合は、仕合は一昨日の夜からつゞきが来て、今宵は猪  
 の七年物、犢牛ほどなをしてやつて、毎時の通直に市へ持つて往て、こりやこの着物  
 に代へて来た、ヤ彼の寝て居る侍は何者ぢや、されば旅の人さうな、一夜明かさせて  
 くれとの事、こな様の心知らねども、引くに引かれずあの通り「ヲ、よう召さつた、  
 殺生をする者は、慈悲をせねば入りわたらぬ」もう往て休みや、外の人も有る程に、

何事有るとも奥よりお出てなさるゝなと、上へきつと申上げや「サア往きや」と、  
 妹を奥へ押遣り戸を、そつと閉いたるだんびら物、鯨尾作り引抜いて逆手に引提げ、  
 「つかく」と寄つて照房が、鳩尾先にどうど打跨ぎ、吭をえぐらんとする腕節、柄共に  
 ほうど握つて動かせず、ヤアなまぬるい上方武士「山力に叶はうかと、振放さん振放さ  
 んと、揉めども引けども淀次郎、力は勝る武藝は家、兩足上げて肩先にて頂がけ、ひ  
 つくりかへし刀捻ぎ取り乗掛り、ヤイ山賊「一昨夜害せし女、則ち彼小袖の主、その  
 夫が面を見よと、左の脇坪ぐつと刺せば」うんとばかりに手足をあがき、照房を載せ  
 ながら、ぐるりくとのたを打つて廻りしは、只分廻しのごとくなり、音に驚き長歌  
 走り出でて、南無三寶此方の兄様何とする、狼藉者遣らぬと打ちかくる熊手の柄、宙  
 にて無手と引掴み、一振ふられ長歌は、宙がへりしてぞ伏してげり、万九下より大聲  
 揚げ、「エ、運強い士ぢや、何したともお身は仕果せう、今までは妹にも隠した、兎狸  
 を捕つて代へて來るとはいつはり、有様は山賊、我等は元來何も知らぬ土百姓、虫同

前の者なれども、貧福は身の境界、頭巾一つ帯一筋、人の物をなんのその、身の欲に  
 取る様な男ぢやない、大事のく御主様を、養ひ難ての業晒し、在所並の商賣か、  
 鋤鋤使ふ事より外、庖丁の持ちやうも知らねども「御主の威光有りがたく、武士に遇  
 うて鏢を削り、如何な手者に出合うても、微傷も負はぬ身が、案の外に仕て遣られた、  
 是ぞ主君の御運の盡、エ、妹口惜い、なんでも御代に立てうぞ、花咲かせうと思うた、  
 物」花が咲くも實が生るも、御運が盡きては詮方ない、思へば無念口惜い、泣いて腹  
 が痛けれど、疵が痛んでほえをと、士に晒るゝ、是が無念で泣かれぬと、顔をしか  
 め澁面つくり、堪へかねたる眼にも、涙は軒の玉水の、板屋を走ることくなり、「ムウ  
 主人の爲の山賊とは、實にもらしき言分、然らばその主人の名は何と言ふ、名乗れ聞  
 かんと言ひければ、万九下よりはつたと睨み、お主は武士で有るまい、主人の名を出  
 す程なれば、山賊はせぬわいやい、ハテ無用の我を立てんより、名乗つて命を助かれ、  
 助けうといへば猶名乗らぬ、いや名のれ、いや名のらぬと」せりあふ聲、親王顯れ出



てたまひ、「是々も汝は何者ぞ、月日の下に生を受けし物ならば、我身の上の哀を知れ」二品夏仁親王とはわが事よと宣へば、ハアツとばかりに淀次郎、万九を引立て飛びしさり、「卑臣布引先生が次男、同苗淀次郎照房、不念の仕方粗忽の恐、身を奉じても晴れがたし」と額を薙に摺付け、涙を流すぞ道理なる、御君手を拍ち給ひ、汝には終に對面せず、父先生が忠死、兄弟夫婦が志、街の説にて聞及ぶ、この女こそ彼長歌、あれこそ兄の万九郎、命を繼ぎしは彼が力、今よりは照房汝を頼むとばかりにて、御涙を浮めたまへば、万九郎顔を上げ、扱はこなたも御味方か、もう死んでもかまはぬ、ア、嬉しさに氣がゆるんで、疵の痛さを覺えて來た、痛い／＼と聲を上げ、わつと泣くこそ哀なれ、照房涙を禁めかね、「父は命を掛て忠を顯し、貴殿は身を捨てて君を助く、この淀次郎は忠もなく功もなく、折角忠有る御邊を切つたるは、弓矢の冥加に盡果し」と万九が疵を押拭ひ、聲を立て、泣きければ、「いやそれは同じ事、忠孝余りしおか様を、殺した天罰の報い覺悟の前、いくらの人に出合ひしが、言分から

働きから、たゞ人とは見えなんだ、運が盡きて熊手の柄、急所であつたかたつた一打、弱る所を絞殺した、あまりいとしう存じて、その上着剝取り下着はその儘、その所に土葬となし、戒名つけるすべ知らず、實名は猶知らず、旅の上臈と書いて、お前に張つて回向する、油筆包に觸體、隨分大事にかけ、母の位牌と列べ置いて拜みます」あんなおか様殺した報、切られ様がまだ足らぬと、詞は拙き土民なれど、心の道はあきらけき、武士恥しき涙なり、長歌やがて油筆包取出だし押開けば、笑めるが如き觸體、のう夢に知らせし父の骨は是なるかと、御前をも打忘れ、肌添へ顔に當て、前後不覺に見えけるが、「實にや弓取は白骨に成つても、その功を顯す事は、同じ筋骨受けながら、何とて父に劣りしぞ、譬は恐れ多けれども、佛は梅檀の煙の下に、三石六斗の骨と成つて、三國に分身し、八恒河沙の迷の衆生を濟度あり、是もこれ弓馬の家の佛舍利ぞや、數萬の軍兵を勵して、武運を守護し給へやと」或は口説き或は勇み、聲も惜まず泣きければ、親王も合掌あり、長歌諸共万九郎、共に袖をぞ絞りける、「淀次

郎謹んで、父が遺誠割符を合せ候へば、御運開くる時節到来、御母天皇は嫂たる者奪ひ出だし奉り天の香久山へ行幸成し申す由、敵早所々に高札を立て、君を捜し奉り、似たる者まで討ち取る事、恰も風後の果を拾ふが如し。今宵當山を御出て有り、尊征伐の義兵思召し立ち給へ、何と万九その疵で、軍の御供成るべきか、ハア、是程の小疵、根太とも存せぬ。若し眞二つに切られたら、二人前と思召せと、手負の氣色は無かりけり、親王感涙おさへかね、頼もしさりながら、忠ある武士の嫁妻を、殺させしも我故、骸を路邊に埋みしとや、今宵の中に掘返し、如何なる寺へも葬り、首途は明日、我はその間、御經讀誦と宣ひて、泣くく入らせ給ひければ、照房はあつとばかり、愁の涙乾かぬに、又惠ある御詞の、露さへ添ひて袖濡るゝ、山路は万九が案内にて、妻を尋ぬる小牡鹿の、道をしるべに分け行くや、父は死して義を勧め、妻は死して忠をなす、本朝の烈女傳、撰まば是や第一の、筆はじめとは成りぬべし。

第五

唄一夜なれ、帯買うて遣ろぞ、帯ぢや名が立つ生でたもれ、ソレ、嫁入さしよとて長持買ひに、柱曆が百度出る、晩か飛鳥の、里も賑ふ麥秋の、麥搗歌の鼻揃へ、皆麥藁に腰掛けて、煙管くはへて休みける、なう、あつう、其方もやがて六十ぢや、早う市馬に嫁取つて、何故樂を仕やらぬぞ、ム、おちやらの言やる事はいの、是程にあがいても、麥一粒身につかぬ、皆姑御の寢酒に請け、酒屋へぐわらく、聞いてたも毎晩五斗味噌肴に天目酒、その跡へ打入飯六よそひづつ、珍らしいお腹でないか、あんな堅いかみ様、姑に設けたは、人身御供の圖に、當つたも、同然とどつと笑へば苦は色かゆる松が鼻、ム、おちやらの奢つた事いやる、生薑酢でも喰へぬが此方の婆様、鳥の啼かぬ先から法界悋氣、大事の息子が顔に嫁御の細工で、猿澤の池程なくぼたまりが出来た、可愛や佛顔がする、質屋に石塔の流が有るが、買出して置かうのと

色々の當言、夜は屏風の際に張番して、寢返さへなる事か、肝心要の穿鑿は、一年に一度あるなし。七夕殿より劣りぢやと、おもひくゝの陰口や、好うても誹る。姑婆、嫁が言はぬは損ならし、既に日影も山の端に、おとし指の大小、浪人めきたる男子、足早に通ししが、立止つて小聲になり、「これ物問はう、飛鳥といふ在家は是よな、此所に今日の本の御主持統天皇、忍びまします御座所、教へてくれよと囁けば、女輩目を見合せ、そりや通すなど。」殼竿振上げ追取巻き、侍なら物書かう、あの高札見よ、春彦の尊様から、天皇を縛つて出せ、褒美に金子千兩との御書付、小判取る事に如才はなけれど、もとより知らねばしよう事ない、殊に當麻の判官殿、日に三度づつ、村中を家捜し。その外山伏順禮、色々に姿を變へての穿鑿、今日は浪人の仕出しか、在所を騒しせびらかす、一度が定擲殺して仕舞へと、會釋もなく打掛くる、飛びしやつて、頼もしく、「扱は天皇に心寄せ有る者共よな、我こそ天皇の御味方、布引左馬頭勝虎といふ者と。」名乗りもあへず稻村を、押分け出づる女の顔、ヤア我妻の淺衣か

勝虎様か嬉しやと、手に手を執れば女子共、大事の御味方なりけると、悦び合ふぞ殊勝なる、先々皇居氣遣はし、何處の程と言ひければ、「我等が古郷のよしみにて、一在所が心を合せ、彼の稻村に隠し置き參らせし、先生様の御最期は御存じにて候ふか。」ヲ、夫も隠れなき五畿内の取沙汰、さて二の宮親王、弟淀次郎傳立てまゐらせ、義兵の企灰聞いたり、天の誠を頭に戴く味方の軍、兄弟心を一致せば、父魂魄も力を添へさせ給ふべし、勝利手の中に覺えたりと言ふ所に、當麻の判官鑓薙刀の鞘はづし、群り來れば、あれ見給へ、この所は何事なう、私等次第に遊ばせと、元の所に夫婦を忍ばせ、殼竿取つて小唄節、唄花は彌生よ娘は十九、情盛よ戀盛しよんがえ、判官喚いて駈來り、「ヤアそらとぼけの鼻唄聞きたくなし、一在所が固まつて、天皇を匿ふよし、間者入れて聞知つたり。」嘘か實かは見よと、鑓追取り走寄り、えいやつと突通す鑓の柄、勝虎得たりと、しつかと取つて、つゝと出て、「ホ、ウ判官殿大儀々々、天皇の御身代に、鑓玉にかゝりたい物ぢやが、尊を討つまでは大事の一命、我等が名代

に、わぬしが胸腹突貫くと、鍵ひつたくれれば、當麻怒つて、ヤア」につくい廣言、彼奴から仕舞うて埒明けよと、拔連れ〜打ちかくる、勝虎夫婦つゝ支え、左手に聞き右手に受け、打立て難立て松原指して三重追うて行く、當麻やうやく切抜けて、命一つを遁れかね、遙向うの稻村是究竟と、走寄つて引明ければ、思ひも寄らぬ天皇、涙にしをれ御座す、ヤア運のつくばふ天皇殿と、御衣を擱んで引出す、女子共遙に見て、やれ悲しや天皇様を殺すはと、我も〜と駈け集まり、穀竿揚げて追取巻き、滅多打ちにはた〜、起上ればちやつと打ち、立上ればたと打つ、頬も天窓も打ちみしやがれ、血みどろらんがいよるばふ所へ、勝虎夫婦取つて返し、ずた〜に切つて捨てたるは、心地よかりし有様なり、時に東西の山際より、旗指物と覺しく嵐に靡き數百流見えたるは、すはや敵と驚けば、ア、御氣遣ひないこと、近郷の爺鼻ども、天皇様の御味方と、天の香具山に黒木の城廓を構へ、手織木綿手織布、旗にさして參上く、奏問すれば叡感深く、淺衣が筆執にて、一々その名を記しける、まづ一番に飛鳥

の庄屋、孫右衛門が女房、鶴の孫まで望月の、丸顔造りに鉢巻しめ、十八の年嫁入してひよつと初子を産初めて、それより年子に十二人、子持筵の乾く間も、夏冬の洗濯物一度も不覺の名を取らず、年貢の銚先未進の矢先、打ち拂ひ切り拂ひ、水牢に入るこゝと十三度、命果報のこの女、この度の大将と、會釋してこそ通りけれ、二番に見えしは縮髪のお六、往來の岡に嫁入して、不産の徳に身の露を、一度も洩さぬ油足いかな敵の新麥も、碓の竿つゝかん程、ほんに五斗や一石は、朝腹なりとぞ申しける、次に見えしは年の比、十八大角豆若草や、露の姑先に立ち、嫁菜交の御加勢と、申すも雪の下百姓、作次郎が妻子なりとぞ名乗りける、次に出でたる女武者、米は五十め喰込んだりや太つたり、兩方の頬げたに、一里塚のお福とて、男選みのいる女、生れ出て跡先に、男に逢ふ事唯一度、男の中にまぶれて居て、仕掛けて見ても構手なく、身は獨居の後家住居、班女が閨の空炷物、肌は伽羅とぞ申しける、扱その外柳本依本貝じゆ貝塚、今井高取、五瀬新庄、安倍日隈の百姓共、都合その勢五百餘騎、中稻、

晩稻を搗きぬき、兵糧米を荷連れ、我もくと馳參る、この君の御聖運、只出づる日の三重如くなり、既に大寶元年四月上旬、近郷の士民等、香久山を皇居に構へ所々に數ヶ所の高櫓、井樓馬出二重の堀、大木枯木を切出だし、深山兀として亂杭逆茂木浩々たり、布木綿を裁ち縫ひて、思ひくの旗指物、夏立つ風に翩翻して、残る花かと見る中にも、日月の御旗、雲に靡きて見えたるは、皇居のしるしと知られける、かゝる處に淀次郎万九郎、親王御夫婦供奉し參らせ、木戸を叩いて、「城中に左馬頭勝虎やおはする、對面せんと呼ばはる聲、百姓共騒立ち、そりやこそ敵ぢやぬかるなと鋤鍬追取り群り出づる、勝虎櫓より飛んで下り、ヤ、龜相すな、あれこそ二の宮親王にて渡らせ給ふ、鎮まれくと下知すれば、ヤア此方の親王様ぢや、皆下に居よ、頭が高い、我身下に居やいのと、土に平伏し三拜す、勝虎かくと奏すれば、大皇叡感淺からず、是はくと出御あり、珍らしや夏仁、浮木の龜とばかりにて、御衣を絞らせませば、親王も御母の、やつれ給ひし龍顏に、こは現なや淺ましやと、互にひ

しと御身を添へ、道理過ぎし御涙、御前伺候の人々も、怪しの賤に至るまで、袖を絞らぬ者はなし、互に有りつる御物語、万九が忠義、巻筆が最期の有様、先生が遺言に任せ、兄弟和融の心を勵し、朝家を守護し奉れと、世に有難き勅諭、重て宣旨有りけるは、「朕笠置にて天帝を祈り、一首の歌の上の句ばかり詠じたり、今こそ大願成就の、下の句を詠み添へん、いてその時の上の句は、「春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香久山」そもこの歌はよな、春は餘寒の氣に閉ぢられ、空は霞に打曇り晴れみ晴れずみ天地人の心まで、清み濁る世を引替へて、夏立つ今日は白雲の、天の羽衣はれくと、干すてふ天の香久山とは、天津御空を譬歌、是を軍の法として、「敵を万里に追ひ退け」天下萬民の萎れし袖を翻し、この香久山の白旗に、靡けやなびけと宣旨あり、入御なれば諸軍勢、ヲ、めてたし頼もしくと、口々に御歌を、吟じ返し讀返し、楯楯取つて押開き、寄來る大勢今やくと待ちかゝる、時を移さず尊の軍兵、雷の如く鳴りわめき、安倍の在家を踏み破り、鯨波をどつとぞ揚げたりける、布引兄

弟万九郎、數多の士民等、鋤鉞竹鍵引提げ、物々し春彦、親に敵たう天罰。今思ひ知らせんと、群る中へ割つて入り、火水になれとぞ三重戦ひける、敵は多勢といひながら、天に背きし鋒先、僅の士民に切立てられ、降人となるも有り、或は討たれ或は逃失せ、残り少くなりければ、尊大きに怒をなし、思ふ敵は天皇親子。城中へ乗込んて、擗殺して捨てんず物と、力士栗毛といふ名馬打立て、一文字に乗入るは、翼の有るが如くなり、既にかうよと見えし所に、あら不思議や布引橋立が一念、影の如くに現れ出て、兩方より執る手綱、鎖に繋ぎし如くにて、乗出せば引戻し、煽れば跡へどろくどろ、はいくくと聲をかけ、鞭をくれてもたぢくく、打つても揉んでも驩逝かず、驩逝かずして尊の涙、人目にそれとも見えざれば、さすがの尊も呆れ果て、齒嚙をなして立つたる所に、勝虎兄弟追付き、聲をも懸けず兩足擗んで引下せば、二人が魂魄搔消す如くに失せにける、尊日月の様なる眼を見出し、ヤア小丁稚め推參と、兄弟を左右に受け、えいやくと捻合ひたり、万九得たりと走り寄り、

後様に切付け、弱る所を淀次郎、兩足かいて投付ければ、勝虎押へて首搔落し、大敵亡びて御代万歳、えい、勝関の聲悦びの聲、上一人の仁の徳、名歌の徳に治りて、五穀豊饒民安全、動かぬ國こそ久しけれ。

# 持統天皇歌軍法

## 解説

□正徳五年八月一日初日竹本座上演

□作者六十三歳

### (一) 史實その雑観

有名な『國性爺合戦』を上演したは正徳五年十一月であるが、本曲は其一つ以前に描かれた作で、切狂言として『生玉心中』を併演してゐる。

持統天皇の朝に、天武天皇の皇子たちが甚だ不和であつて、穩かならざる情態であつた其史實を捉えて、日蝕の日に生れた一の宮春彦尊と、皇嗣夏仁親王との争ひ

を骨子とし、その間忠臣烈婦の物語を挿んだ脚色である。そして『天智天皇』の作に於ける『秋の田の刈穂の庵』の歌を以て其作の色彩とした如く、この作には『春過ぎて夏來にけらし白妙』の詠を取つて脚色の一端に應用してゐる。春過ぎての『春』を一の皇子春彦尊に擬し、夏來にけらしの『夏』を二の皇子夏仁親王と觀、象徴的に御製の歌意と、二皇子の異つた性格とを寫してゐる。

天皇が女性である因縁から、この作では女性が多く活躍する。布引兄弟の妻淺衣と卷筆の忠烈、國栖の娘長歌後に夏仁親王妃の孝貞、その他仕出し端役に至るまで努めて女を用ひて居る。

私が屢々各編に於て述べた近松の『對皇室觀』と云つたものが、本作の上にも殊に著るしく窺ふことが出来るのである、それは左記第二段の解説のくだりに述べる。

### (二) 殿上人と田舎娘と山家男の對照

持統天皇が皇嗣を定めらるゝに先立つて、先づ御嫁后を撰み、其後世嗣の太子御沙汰ある可しとの宣旨により、各國に命を下して、身分の高下を論ぜず孝心勝れた娘を選び出すこととなる。そして撰出された娘たちを宮中に召集して、天皇自ら御覽になる。第一段の始めにある『女孝行づくし』の節事がそれである、その孝女と云ふも多くは『二十四孝』の孝子を女性に變へて翻譯したものである。此多くの孝女の中から、大和吉野郡の紙漉き國栖の阿惣が娘長歌が見出され、皇嗣の嫁后と云ふことに決定する。

龍田明神の拜殿で、后成の装束始めが行はれる。勅使中臣の大納言を始め内侍命婦の上臈たち、神主その他が居並んだ儀式の席で、吉野の奥の山家育ちの長歌が、恥しいやら當惑やらで、又しても逃げ出さうとする滑稽がある。後の装束大袿小袿袍唐衣五つ衣下襲緋の袴裳袴など、着せやうとするが顔を赤めて遂には泣き出すと



云ふ有様。何の科こて斯こんな目に逢ふ事か、「うたてやのく、わしや在所へ往いにます」と逃げ廻る、「恥しけれど在所では、襷たすひつかけ搦粉木持つて、紙屑しじとんく叩たたいて、吉野川に膝節ひざぶまで浸ひつて紙屑洗しひ、兄様が紙漉しきやれば板いに張はつて乾かすやら……夜晝よるひ母親ははに附添つふて兄弟嬉うれしう暮くしたものの、たつた一人の母様に逢ふこともならいで、后きさきになつて何とせう」と泣く。母も兄も大内へ呼び入れるから安心せよと云ふ、「コレ女御衆、母様内裏へ御座つたら、萬事不自由のないやうに氣を付けて下されや」と、母の朝茶の好きなこと、春日祭に落した數珠袋を縫ふのに、「布片きがあらば一尺程、もらかす事はなるまいか」と云ひ、談議まゐりに穿かす草足袋くさあし誂たへて進ぜたい、此程一足貫つふたが九文半で指先ゆびきも這入こらず、「折角人の志、穿かすにも置かれぬと、足の腓こぶにくくり付けて歩あかつしやる」と天真爛漫な話から、「母様ちつと鐵平てつへいで、十六文半ではきつしりと合あひます」と云ふと、女共驚おどいて「ア、こは、そんな大きい

足袋ならば、仁王の足袋とて誂たへずば、お袋様の足袋とは、そりやどうも申されまいいと笑わふてゐる。このあたりの描寫、いかにも田舎娘が殿上人に取圍とりこまれての、不釣合ふてあな珍妙めづな光景がよく描かれてゐる、後の「妹脊山の御殿」など連想される場面である。

こゝへ長歌の兄の萬九郎が尋ねて来る、「都の町の紙問屋に名を知られた吉野の紙漉・萬九とは此鼻」と云つた田舎調子の拵直者。妹の長歌が輿こしに乗るのを見て、「ムウ妹が輿こしに乗らるゝか、ほんの氏うぢなうて玉の輿こし、内てはろくな味噌漉しさへ無かつた、ちやうさや、ようさに成りやつたか、在所の氏神うぢまさりぢや」と、三拜するの面おも白い。相手に殿上の人々を廻まわして置いて、山出しの田舎娘と山家男の鄙しんぶりは、對照たいの妙を得て興味がある。

(三) 日本開關大惡王、紙づくしのつらね

一の皇子春彦尊は、後の『妹背山』などに見る入鹿大臣とか、又は『菅原』の時平公と云ふた役柄の、扮本とも見る可き大悪の雲上人に描かれてゐる。第一段にて、夏仁親王に皇嗣が極ると、不平不満の春彦尊はいよ／＼謀反の萌しを現はすに至る。龍田神社の社頭で、忠臣橋立左衛門秋廣が馬上で駈付け、涙を揮つて諫言する。尊は嘲笑して跳ね付ける、數多の郎黨の爲めに取つて抑へられ、橋立は牙を嚙んで無念がる。身は一寸も動かぬが兩眼は自由であると、全身の精力を籠めて尊の眼を睨み付ける、『五臟の力眼に迫上げ揉み上げて、睨む力に左右の睨さつと裂け、肝の臟をせり破り、眼球に血綿をつらね、三寸ばかり脱け出』て、尊の袖に入ると忽ち、橋立が魂乗り移つて、神主三位青根郡司の兩人を兩脇に引挟み、一と締め締め殺すくだけがある。

春彦尊の大悪ぶりは此段末の一節に、力の籠つた豪壯な文章で描かれてゐる。『日

本開闢大惡王……我れ龍の小車を秋津洲に廻らして、夏仁の夏草を刈り絶さん』と、拜殿に飛上り舞殿に飛上り、樓門廻廊縦横無盡に踏み轟かし、『提婆達多阿闍世王、班足王の日の本に再來したる如く』にて、荒れに荒れて還御ある。

此場に、紙漉きの萬九郎が、尊方の侍が長歌の乗輿を支へるのを遮つて、商賣柄の紙づくしのつらねがある、一寸洒落た妙文である。『この萬九に向つて紙穿鑿は舌長丈長、おのらが美濃紙にはちつと杉原であるまいか、漆漉のかみは見とほし、春彦の尊と一縮になつて、妹を奪ふて鳥の子とは……腰にさいたる七九寸、片つばしに半切紙、半死半生半帖六文、今の相場で一分五厘の浮世の中、命一つは露ちり紙、末代の手本紙』など、うまいことを述べ立て、居る。

#### (四) 皇家と平民との握手、春日神鹿の身替り

第二段は吉野の奥の紙漉き、萬九郎が住家である。第二の宮夏仁親王は煩はしい世を避けて、風月と呼び楮を商ふ山賤と成り流浪する内、兼て馴染の萬九の家に一宿しやうと尋ね寄ると、其處へ吉野法師に隠れもない荒土佐坊雷雲がやつて来る。夕暮の山路を、馬上に大太刀を帶し、鞍の鹽手に小提灯結び下げ只一騎コツ／＼と歩ませて来る情景は、さすがに吉野の山中らしい風趣が見える。

雷雲法師を乗せた馬が、萬九の門まで来ると、俄に驚ひて前脚搔き、尻込みして進まない。それは其處に夏仁親王が在るからで、天孫神位に恐れての故である。親王が近寄り給ふと、馬は益々恐れ狂ふて、到頭雷雲法師を眞逆様に、門の柱へしたたかに落し當てる。

萬九郎は山賤の風月を、夏仁親王の忍びの姿と知らぬが佛、幸ひ妹の長歌も風月に心があると見て取つて、夫婦にしやうと話が進む。『身に過ぎた果報は災の基、破

れ鍋に綴蓋、身に相應が目出度い』と、勝手な理屈を並べながら祝言の盃が取り代はされる。母が親子の盃と、飲んで親王に酌すと、不思議や土器飛び散つて微塵に碎け、母は其場へ顛倒し五體すくんで絶息する。湯よ水よと騒動したが其甲斐もなかつた時、親王は『免す』と一語、母は忽ち蘇生して晴々と元の如くに回復する。一座不思議に驚くうち、『今は何をか包む可き、持統天皇第二の宮二品夏仁親王とは我が事なり』と名乗つて聞かすと、一同飛びしさつて三拜する。

兎角するうち、例の吉野法師の雷雲が、お尋ねの夏仁親王を捕へんと、此家を目懸けて押し入る。加勢の法師が數十人門口に押寄せる、雷雲は萬九郎を右手の小脇に挟み、左の手にて親王の後髪を取つて引据へ。ヤアと計り、土足を上げて蹴らうとした刹那、『不思議やな、天罰冥罰忽ちに、眼もくらみ足萎れ、五體縮んで働かず』其儘其處へ倒れてしまふ。

以上、この一齣には、雲上の貴人と、賤しい士民との間に、親しみの握手が代はされたことが描かれてゐる。夏仁親王が山賤となつて萬九の宿に寄り、妹の長歌と妹脊の契りを結ぶ親しみは、直に皇家と平民の握手を描現したものに外ならぬ。而かも又一方には、親王の姿を見ては馬も恐れ退り、盃を酌す母親は卒倒し、足を上げやうとした雷雲法師は立ちすくむ、と云ふ風に、天孫神位の尊嚴に打たれては、朝日に向ふ霜柱のやう、一とたまりもないと云つた、御稜威の靈妙を謹寫してゐる。また以て近松が、皇家に對し、又一般平民(當代の下級族)に對して、如何なる觀照眼を持って居たか、窺ひ知られやう。

第二段第二場、春日山にて、親王及び妃が、再び雷雲等の爲に包圍される。二人は神前の、白木綿懸けた榊葉の茂みに身を匿し、イザと云はゞ自刃ぞと覺悟の刀を擬する時。不思議や彼方に聲あつて、「持統天皇第二の宮、二品夏仁親王后長歌これ

に在り」と名乗つて、二人の面貌髮容、たゞ透き寫す畫像のやうに、全く同じ姿の男女が、夢ゆめまほろし幻を見るやうに現はれ出て、雷雲等吉野法師の大勢と渡り合ふて奮戦する、たゞし衆寡敵せず二人は遂に討死する。雷雲その死骸を引上げ見ると、こはいかに、人にはあらで、牝鹿牡鹿の番つがひの體からだが、朱あけになつて倒れて居たのである。春日の神鹿、牡鹿牝鹿の配偶が、優しくも親王や親王妃の、身替りに立つたと云ふ、美しい憐れな挿話が添えられてゐる。

### (五) 首繪の鞠と繪踏、蹴鞠の由來其他

春彦尊は愈々惡王ぶりを發揮し、南庭に獄屋を作り御繼母持統天皇を遷座し、暴威のあるだけを盡くして居る。尊の傳役當麻の判官が媚こび諂へつらふて、夏仁親王の顔容を鞠に描かせ彩色し、即ち親王の首鞠を作つて献上する。尊は興ある事と嘉賞し、

當番の士、布引先生の二子である左馬頭勝虎、淀次郎照房の兄弟を召して、この首鞠を二三百蹴つてのけよと命令する。恰も切支丹宗徒に對するマリヤの像の踏繪と同じく、親王方の忠臣である布引兄弟は、互に顔を見合せて當惑する條がある。鞠に敵の首を描いて蹴り付けやうと云ふ考案は、凝つたもので新しく、彼の格氣講の「怨みの人形」と同巧異曲のものであらう。

此處にて當麻の判官が、蹴鞠の由來を説く條がある。唐土黃帝の御代の時、蚩尤といひし朝敵はびこり、烏江の海を隔て亡すべき様なかりしに、黃帝革を以て鞠を作らせ、蚩尤が首を表し、諸人の足に掛けさせ調伏あり、終に蚩尤をみく亡し……：今の世迄も首桶に、鞠桶を用ふること、この因縁と承る。されば魔離るゝと書いて、まりと訓む相傳あり」と述べてゐる。前述の夏仁親王の首鞠の趣向も一つは此蚩尤の首の故事から採つたものである事は明かであらう。

後に、大内に於て蹴鞠の御遊の場がある。その光景は、「鞠のくれ、花の木この間に頻まに上下し、柳が透間すきま屢高低す、四本懸りの枝垂れて、築地の上に雲入の、姿は誰れと見えねども、鞠の鞠の色もよく、聲もありくく杳の音云々」とある。蹴鞠の場所は總て鞠懸りと稱し、四方を鞠垣で圍繞し其中へ懸りの木を四本植えた（普通は松柳櫻楓とし、時には其季節の花木）ものである。その四本の花木の透間を、高く低く鞠の上下する様、掛ける聲、杳の蹴音など、蹴鞠の情趣が巧みに記述されてゐる。本作では、第三段に特に蹴鞠の一段を出して主要な場面として見せ、忠臣布引の先生せんじやうが蹴鞠によつて春彦尊に近付き、大逆を懲らさうと企てる趣向は。著名な史實として知られた、藤原鎌足が鞠の遊びを縁として、中大兄皇子（持統天皇の父帝天智天皇）に接近し、天下の大事を謀つたとある物語に據つた脚色である。これも一つは持統天皇と天智天皇の關係からと、又一つは當時町人の間にも蹴鞠の遊びが盛

んであつたところから、如才なく採り入れた譯であらう。

(六) 六相嫁同士の忠貞争ひ、子種問答、浮氣除けの呪

第三段、布引先生の館。布引兄弟の相嫁、兄嫁の淺衣、弟嫁の卷筆、揃ひも揃ひも孝貞無二、忠義一圖の女性に描かれてゐる。布引兄弟が大内當番の留主居の心配りから、兄弟が歸館、互に龍虎の争ふ如き不和の顔色に、二人の嫁は胸轟かし、何れも夫に引つ添ふて同じやうに睨み合ふ、果は夫同士の争論に釣り込まれて、互に妻同士の争ひとなる。

春彦尊の下命により、兄の左馬頭は親王を討て天皇を助けんと主張し、弟の淀次郎は親王を助けて天皇の御命は構はぬと力説する。何れも忠義の一念には變りはないが、其執る道が異つてゐた。父の先生これ聞いて、『そも何たる争ひぞ……親

を殺せば子も死ぬる、子を殺せば親も死す』御母も御子も共に助ける途がある筈と、ひそかに獨り決意して、わざと兄弟の子を罵つて勘當する。そして先生は、御母子を助くる途は、春彦尊を討ち奉るより外はないと、折からの鞠の御遊に召されたを幸ひと、大内に乗り込んで行く。その舅の安否を氣遣ふて、せめて首は人手に渡さぬと、弟嫁の卷筆が編笠に裾からげ、築地の陰に忍び寄ると、兄嫁の淺衣も同様の姿で計らず出會ふ。こゝで二人が先陣争ひの一問一答があつて、互に負けず劣らず行く手を争ふ。懸の内には『布引先生狼藉者』と騒動する、『エ、口惜や』と仕損じた舅の聲がする、亂戟の音血汐の雨が降つて來る、淺衣は逸早く懸の中へ飛び込む、卷筆は焦つ。遂に淺衣は持統天皇を助け負ひ奉つて、築地の上から飛んで降りる。卷筆は舅の首を拾ひ奪つて、二人は心も相嫁同士、手を携へて一散に龍田越に落ちて行く。『夫を思ふ山鳥の、はつ尾の鏡嫁鏡、末代末世の花嫁に、煎じて吸せ瀧の水、

落ちて行衛を頼もしき」と、筆を極めて讚美してゐる。

この女房同士の先陣争ひの構想は、後世の戯曲に最も多く襲用されたもので、又常に有功な舞台効果を寄與した趣向である。

この段の始めに、淺衣卷筆の兩女が「子種」に付ての面白い對話が挿まれてゐる。何故に子が生れぬか、それは子種がないからぢやと云ふ。それでは子種と云ふは如何なものかと問ふ、あの鶏の卵が鶏になるやうに、人の子種も鶏卵に似たものであらうと笑ふてゐる。腰元のりんが口を出して、旦那様には子種がある、お風呂の時に見ましたが、鶏卵のやうな子種が而かも二つあると、大に笑はせる。話の序に、大事の男を餘所の女子に肌觸れさせぬ秘傳があるとして、男の臍に印判捺えよと言ふ。いや〜其手は古い、一度實行したれど、何處の女子の汗でやら、印判はがして其跡へ、ぬけ〜と謀判がしてあつたと、作者一流の輕妙な警句で抱腹絶倒せしめてゐる。

る。

(七)『持統天皇道行』と『春過ぎて』の御詠

第四段は『持統天皇道行』に次いで、笠置の山中で卷筆は山賊實は万九郎のために殺害される。この亡靈が、たま〜万九郎の家に一宿した夫淀次郎照房の枕に現はれて、二つの悦び二つの憂ひを告げる。照房は初めて妻の慘死を知り、宿の主、万九郎を妻の敵と斬り倒す。万九郎は、忠義一圖に心くらみ卷筆を殺害した一部始終を物語る、懺悔の一節は涙の文字で綴られてゐる。

山賊、實は忠義の下僕が、誤つて味方の一人を殺害すると云ふ悲劇や、慘殺された女の亡靈が夫の枕上に立つてそれを訴へると云ふ因果劇は、随分古くから使ひ慣らされた手法であつて、相當鼻につく脚色である。

第五段は大和飛鳥の里、土民やその女房たちが、天皇を擁護し御味方にと馳せ参ずる。天の香具山に黒木の城を設け守護し奉る。土民共が協同一致して身命を忘れ天皇の御爲に忠を盡くすと云ふ脚色になつてゐる。こゝへ布引淀次郎万九郎が、夏仁親王御夫婦を奉じて、城中の布引左馬頭を尋ねて来る。天皇御母子久々の御對面となつて皆々感涙に咽ぶ。天皇は先に笠置の山で、天帝に祈禱のため立願し、一首の歌の上の句ばかりを詠み置き、下の句は願成就の曉に詠み加へて、三十一文字に聯ね立てやうと企てられた。その上の句と云ふは、『春過ぎて夏來にけらし白妙の』と云ふので、こゝに大願成就して、『衣ほすてふ天の香久山』と下の句をつらねられる。この歌は誰れも知る『百人一首』に收められた御歌である(實は疑問であるが)、天皇は此御歌を解釋して、春は餘寒の氣に閉ぢられ、空は霞に曇り人心また清み濁る世を引替へて、夏立つ今日は白雲の空『天の羽衣はればれと、干すてふ天の香久山と

は、天津御空を誓へ歌、これを軍の法として、敵を萬里に追ひ退け』天下萬民の萎れた袖を、此香久山の白旗に、靡けや靡けと宣言がある。諸軍勢勇み立ち、萬口一齊に御歌を吟誦しつゝ、敵陣に向ふことになる。『持統天皇歌軍法』の外題の説明が是れである。



つれづれ草

一段目

扱も其後、序つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかたなく書きつければ、あやしうこそ物狂ほしけれ、いてや當院後宇多の法皇と申し奉るは、いにしへの聖の御代の政暗からず、利世安民の御恵、いともかしくくましませども、さる仔細にて天位をおりぬ、京極の女院諸共到大覺寺に移らせ給ひ、新院と稱し奉る、宮腹々にましますうち、おとの姫宮すげの宮と申せしは御形世にめてたく、久米の仙人も通を失ひつべき御よそほひ、よそにもさぞな忍ぶの浦、蜚のみるめも所せく、くらぶの山も守る人繁きにわりなく通はん戀路ならずば、やもめ住みこそましならめと、御縁邊の結びもなく、既に二八の春秋を、御覽じすてた

る御にほひ、上臈はしたの女房まで優にのどけき洞の内、竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬ、一人のみありさま、只人舎人に至るまで、はふれにたれどなまめかし、程につきつゝ時にあふ君の恵ぞ有難き、院參多き其中に、大織冠十九代吉田の兼顯が三男左兵衛佐卜部の兼好とて、上北面の侍あり、されば神道は更にもいはじ、文質彬々として古風を仰ぎ、儒釋道を兼ね備へ、和歌にあやしく妙にして、天性やさしき男なれば、玉體に近習し、晝夜御前に伺候する、頃は正和元年四月なかばの事なるに女院奏問ありけるは、今年は雨風打續き、春のゆくへも知らざりし、されば姫宮の御方に、さぞつれづれにましまさん、いづ方へも行幸なし、慰めまゐらせたらうおはしますと宣へば、院げにもと思召し、さあらば吉田山神祇館眺望無雙の所なり、幸ひ兼好案内にて慰め申せとの院宣なり、承つて人々は、供奉の營み花々しく、すてに用意と三重聞えけり、定まる日にもなりしかば、御車をさしよせて、各相待ちある所に、警蹕にや驚きけん、御牛俄に猛り出てあなたこなたへ驅け廻る、舍人慌てふためけど

もしこり立たる牛なれば、更にしづまる氣色なく、濱床にとびあがり、にれ打噛みてぞ臥しにける、爰に仙洞守護の武士淺原判官爲頼とて、てんぶ不敵の者ありしが、御牛飼の齋王丸が小腕とつてねぢ伏せ、おのめは何が役なれば、かゝる奇怪をなしけるぞ、討つて棄てんとひしめくを兼好継りおしとゞめ、尤かれが所役を輕んじたるに似たれども、牛に分別なし、足あればいづくへか行かざらん、其上彼めをうたれては、けふの御遊の妨げ不興の上のけがれなり、怪みを見て怪まざれば、怪み却て破るとかや、後日にきつと制せられよ、けふはひらにと詫びければ、いづれも此理に服しつゝ、許されよ淺原、こたへられよ爲頼と、聲々に宣へば力及ばずつき放し、エ、兼好だに無かりせば、おのれ生けては置かじをいと、尙齋王をにらみつけ、肱を張つて立ちければ、齋王生ける心地なく、震ひく立ち上り、やうく牛をしづめつゝ御車にぞ掛けにける、事をさまつて其後に、宮御車に召されるれば、前後の行列おごそかにて、吉田の社に三重行啓ある、卯子ばかりの若楓、花よりもなほ吉田山、みすの葵に風通ふ

賀茂山遠く見給へば、初時鳥雲間より二聲三聲告げ渡れば、女房達の其中に、侍従の局とて色好みありけるが、日比兼好に心をかけ、たよりもがなと思ひ内の色をば外に悟られじと、「なう〜お供の殿達、只今の時鳥いかゞ聞かせ給ふぞと、につこと會釋し言ひければ、さすがなまめく上達部色をとられて答はなく、數ならぬ身は存ぜずと、震ひ〜いふもあり、時鳥より只今のお詞こそと、言ふもあれば、宮を初め女房たち、扱したるき男達やと、一度にちらつと笑はるゝ、されども兼好取敢ず、久方の雲井のどかにいづる日の、光に匂ふ山時鳥と、吟じもあへず袖かき合せ謹みたる品かたち 宮御心うち亂れ、堪へかね給ふ風情にて、誠に兼好が歌のさま、けふの遊の花なるぞや、是へ是へと、御車近く色々の名香を御扇に載せられて、恥かしながらみづからが燻ゆる思の煙なり、あはれとも見よかしと、ほゝゑみ給ふ御顔ばせ、松に時雨の兼好も少しは色に染めぬべし、侍従此由見もわからず、早むつとせき轟き、顔に紅葉をひき散らし、人目もわかぬ戀衣、君と尻目にらみ合ひ、溜息ほつとつきさま

に、お車いそぎやと、ゆふしての神の御前に 三重着き給ふ、扱姫宮はさま〜御祈念事終り、かたはらに幕うたせ、下戸ならぬこそ男の子はよけれど、女房達のお酌にて御酒宴始まる折節、牧笛風に誘はれて、賤の童が野飼の牛、あの山見さい、此山又見さい、戴きつれた大原木に、花折り添へて、比しも今は灌佛の、花もてそ〜く薬の水さなきだに、一夏には極ならねど摘む花を、召せ〜召されよや、此花召せと賣りにけり、幕の内には御覽して、さぞ興あらん花の名を數へて賣れや、召さんとあれば、「女の童ども承りさん候、我々は誠は當社に仕へ奉る禰宜巫女にて候が、宮此度の御詣て、優曇華と存ずる故、御慰めのため、かやうにしつらひ参りたり」さあらば花の名によそへ、面白う舞ひ奏て、神樂太鼓の手をつくし、神と君との御心を、いざ〜慰め申さんと、拍子とり〜聲をかしくぞ歌ひける、歌面白の賤が仕業や、草刈笛のねよげに見ゆる、花は山吹藤杜若、黄菊紅菊櫻草、賀茂のお山に咲く花は、丹のつゝじと白つゝじ、たが手に觸れてもちつゝじ、歌牡丹芍薬われもかう、忍び〜くるく

る、やれかざ車や、花一つたもや、袂の王椿、紫苑石竹月見草、有明のつれなく見  
 し別れより、おのが鳴く音か鶏頭花、根笹まじりの龍騰花、葦紫陽花、金仙花、君が手馴  
 の手鞠の花は、一二三四五六七八九よ、とんと落ちて名は立たじ、我も洩らすな  
 水葵、池におもだか真菰草、われは野に咲くあだ花よ、さんさ折らば疾く折れ散らぬ  
 まに、さんさのさ百合に、ゆりかけく、さつとゆりかけ小姫百合、とけて添寝の常  
 夏や、稀の御幸に此度は幣とりあへず卯の花を、神のまにくをりはへて、いざ／＼  
 神樂を捧げんと、おのがとりどり打鳴らす、太鼓の拍子を三重すめける、神樂こそ  
 なまめかし、げに興ありて見えければ、宮はことなる御感あり、おのく祿を賜はりて、  
 めてたく還御なされける、誠に艶なる御遊なりとて、皆勇みて歸らせ給ひける。

二段目

さて其後、よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうくしく玉の盃の底

なき心地霜雪に、弱る姿の菅の宮、兼好が色香をばおぼし忘る、隙もなく、たより波  
 間に漕ぐ船の、こがれわびさせ給ひけり、されども侍従が戀路はしろし召さず密に召  
 され、近比おことがさげしきも恥しく思へども、をさなきより馴れなじみ、心を置か  
 ぬ露の身の、あだに消えんと思ひ切り、包まずあかし頼むぞと、御心底こま／＼と語  
 りくどかせ給ひ、何とぞ御身がはからひにて、今宵兼好を忍ばせ、一夜逢はせてえさ  
 せよや、萬事は頼むと、御袖より御文を取出し、侍従が膝にさしおかれ、あら恥しや  
 只よいやうにとばかりにて奥にぞ入らせ給ひける、侍従ははつと胸つぶれ、扱はわら  
 はが思はくの妨げぞと、御文を寸々に破りすて、いッかにお主なればとて、此戀は  
 かりは、しまけじもの「エ、しやらくさや、腹だちやと、やがて表に走り出て、浅原  
 判官爲頼を招き、なう爲頼殿、此比夜なく御庭へ犬猫の入来り、草木をあらし候へ  
 ば宵のうち折々は「心をつけて警護あれとの仰せにて候と、誠しやかにたばかりて、  
 奥をさしてぞ入りにける、既に其日も暮れければ御現なや姫宮は、侍従の局が媒にて

兼好やくるならんと、月待つふりにて、御庭の籬のもとに出て給ふ、かくとは知らず  
 浅原は御庭警護に來りしを、宮はそれぞと嬉しくて、する／＼と走りより、顔と顔を  
 見合せ、互に興さめ詞なく、かいふつて退き給ふは、薪を負へる山人の、花に休らふ  
 其風情、手持ちあしくぞ入り給ふ、扱兼好は姫宮の御情忘れもせて、有明の獨寢が  
 ちに、まどろむ夜なきねやの内、ア、あだなりと起き出て、廊の長押に尻うちかけ、  
 顯基の中納言、罪なくて見んと云ふ、あはれ配所の月もがな、又露こそはあはれなれ  
 と、獨眺めて居たりける、かゝる所へ侍従の局、優なるさまにてつか／＼と來り、膝  
 の上にゐかゝれば、匂も移るばかりなり、兼好あだめく男ならず、便あし／＼と思ひ  
 けん、すり退けば、もたれより、立ちのけば引きとゞめ、いやさのみな厭ひ給ひぞよ、  
 何が扱姫宮さまの御寵愛の此殿を、わらはが分にて、お情とは及びなし、さりながら  
 暫し問ひたきこととはいへど、云ふべきかこちあらざれば、庭の面を見廻して、な  
 らあ竹にも吳竹のいや婿竹のなんどとて、品かはる由承る」教へてたべとありけ

れば、兼好事なき顔ばせにてさん候、吳竹は葉細く、河竹は葉廣しと、いはせも果  
 てず、手をとりにて、されば其竹ならば、わりても見せん我心、死ぬるばかりに思へど  
 も、ア、數ならぬ深山木の、木折にならぬ戀の道、濡れぬさきこそ厭ふべき、露の情  
 をかけ給へ、つれなき人やとたはれける、さしもの兼好、いかゞ答へんと、しばし心  
 を碎く折節、宮、物蔭より御覽あり、大きに嫉み急かせ給ひ、侍従々々と御手をうち  
 頬に召せば、はつと驚き、顔うち赤めて立出る、宮御色さまかはり、扱々おことは見  
 限りはてたる心底かな、みづからが名をもくだし、とがなき兼好がうき名も立て、其  
 上掟を破るといひ、重ね／＼の不義の者、ア、腹立や、つらにくや何方へも出てゆけ  
 來世までの勘當ぞ、はや／＼と、御聲震ひ、人目づつみは高けれど、堰くにせかれぬ  
 むもれ水、湯ともなりなん御氣色にて、奥にぞ入らせ給ひける、侍従呆れはて、しば  
 し御跡をながめ、涙をばら／＼と流し、くちをしや、いかに主従なればとて、わらは  
 が名を立て追出し、其身の戀を叶へんとは、扱情なや、つれなやな、所詮此事奏聞し

一つ科にと思へども、いや待てしげし我戀路、絶えなば絶えね玉の緒の、いとしき人の仇ならめと、思ふ内にも悪念の、怨みめぐるや小車の、丑の時詣して思ひ知らせん腹立ちや、ア、腹立ちやねたましやと、拳を握り齒を鳴らし、はつたとにらむ眼より血の涙をばら／＼／＼、腹立ちやと、呪ひ出る心の中、おそろしくもまた三重不便なり、是は扱置き、貴船の宮には社人達寄合ひて、扱も神前の鳥居に、人をのろうと見え、大釘六本うちてあり、是は都方の女ばら、恪氣嫉妬の怨にて、丑の時詣すると覺えたり、神は非禮を受け給はず、勿體なし／＼、いざ抜きすてんといへば、中にも老ひたる宮づこ、いや／＼所願空しくなすこと、却て慈悲の道ならず、所詮神前の橋を引きたやすく渡られぬやうにせば、おのづからとまらんと云へば、此儀尤と同じつゝ、橋の中の間開放し、打連れだちて歸る波、猶物すごき、三重蜘蛛の圍に荒れたる駒は繫ぐとも、思はぬ君を思ひてし、人をうけへば忘草、たとひ我身に生ふるとも、憎しつらしのねぎ言を、かけて呪ひの印あらなん、げにや思ふ事、金輪にもゆる燈火に

薪加ふる瞋恚のほむら、是や迷ひといふならく、奈落の罪も恐しや、梅の花かうばしき臘月夜に許を訪ひ、御垣が原の露わけし、其有明も身の上に、せめて一夜だに逢瀬の情あら海や、嶮しき山に迷ふとも、嬉しかるべき我命、刈穂の庵の露深き、稻葉にそぼつ秋の田の、畦の細道いとせばき、女心の暗きより、鞍馬風はさつ／＼、しん／＼と、又とう／＼たる谷の水音とんどろ、とゞろと鳴る神の、貴船の川邊に着きけるが、南無三寶、橋は引たり、水は高し、よしそれとても、一念の矢先にかけん巖を傳ひ、上に臥したる枯木の枝引撓め、取付て手ぐりにたぐりて渡りしは、彼の高名の木登りもかくやと怪しう、三重見えにける、さうなく渡りつく程に、神前に畏り、こよひ七日の満參なり、験を見せて給はれと、深く祈誓し、それよりも鳥居に向つて、此釘は姫宮にうつなるぞ、憎しつらしの一念、鬼ともなれ、蛇ともなれ、立所に取殺し我を兼好に添はせてたべ、あら口惜しやと丁ど打ち、腹立ちやとはたと打ち、ちやう／＼、丁ど打ちければ、鳥居より血流れて、貴船の川もくれなゐの錦をさらすが如く

なり、侍従喜び手を合せ、大願成就ありがたしと、千たび百たび伏し拜み、立歸る川波の、又元の木に手をかけて、なかば渡ると見えけるが、悲しや此枝ほつきと折れ、深みにたんぶと落ちける時、不思議や鳥居うめき出て、御神體猛火と燃え、山は震動雷電し、風雨車軸を三重流しける、社人達驚きて、手々に松明とぼしつれ、川邊に來れば、恐しや渦巻く淵の底よりも、侍従の姿蛇身となり、紅の舌を垂れ、無念や腹立や、思ふ男をいたづらに、餘所の花となしけるか、あらねたましやと飛びあがり、鳥居をくるりくるり〜と、苦しげにつく息の、炎にまぎれ失せてけり、女の性は皆僻めり、貪慾深く理に暗く、つたなき女の色に耽るはあろかなり、みづから戒めて、恐るべく慎むべきは只此惑ひなりけるはと、皆感ぜぬ人こそなかりけれ。

三段目

去程に、飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂み悲みゆきかひて、

花やかなりし姫宮も、風の心地と臥し給ふ、かゝる病もあるにこそ、夜にだになれば發熱し、御殿屋鳴りし、光りもの現れて、おびえおそはれ給ふゆゑ、典藥の頭敦重入道、醫師忠盛を初め、醫陰の兩道術をつくし、頭を病ましめ、額をあつめ、公卿詮議とり〜なり、中にも兼好は心に籠めし言の葉の、色にや出んと思へども、御心を測り兼ね、晝夜相詰めぬられけり、既に其夜も初夜の比、うしろの簾をそつと上げ、化したる女さし覗く、人々是はと見廻せば、膝元につくと立つ、太刀を抜いて切拂へば、忽ちに庭にあり、或は戸障子壁を走り、欄干を這ひめぐり、ばつと消えては又現れ、あらはれては、姫宮の御枕に立寄るを、人々驚きとりまはせば、虚空に立て、うらめしや、妾は蓬生の葉末の露と消えながら、残る怨みはありし報い、思ひ知らずや思ひ知れ、怨めしの心や、あら怨めしの姿やと、枕にとびおり、打つかと思へば、猛火となつてぞ失せにける、宮は暫く絶え入らせ給へば、上から下に至るまで、是は是はとばかりにて、慌てふためくばかりなり、御痛はしや院后、御褥にひれ伏して、げ

にや高きも賤きも、子といふものは持たてなん、萬寶に飽き満ちて、子ゆゑに物を思ふぞや、命長ければ恥多し、四十に足らて果て死なば、今のつらさはよも聞かじと、歎かせ給ふぞ道理なる、時に淺原申すやう、「某が弟に具覺坊とて、眞言の大徳あり」かれを召されて御祈あるべうもやと申上ぐる、此儀尤然るべし、早とくくと宣へば畏つて候と、やがて使を立てらるゝ、具覺坊心得て、持經本尊とりもたせ、大床に伺候する、兼好は出むかひして、まづ姫宮の御物の怪、いかなる祟と御覺して候といへば、具覺息を閉ぢ、目をふさぎ、阿字本不生の虚空界に至て、此障を鑑るに、過ぎし吉田の御社參、赤舌日といふ大惡日に當りて候、然れば神慮の御咎め顯然たり、いてくゝ加持し申さんと、壇を飾れば、いや是なう具覺坊、「赤舌日といふ事は、陰陽道に沙汰なき事なり、其上惡日なればとて、神慮の咎めあるべきにあらず、惡日に吉事をなすに必ず吉事、又吉日とても惡事をなさば悪しかるべし、何の故なき神の咎め心得がたしといへば、具覺氣色を損じ、エ、なま物しりの物とがめ、四部の弟子はな

比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣る、かゝる下品の優婆塞にて、六根淨の比丘に向ひ、あつばれ舌長しといへば、兼好につこと笑ひ、扱仰々しの六根淨、四部の弟子はさは知らず、いかに御身が立腹するとて、君の御爲言ふべき事を言ふまじきか、思ふこと言はねば腹ふくるゝ、よし神の祟にもせよ、御邊が分にて神慮をなだめんとは、それこそ誠に舌長しと、あざ笑つて申さるれば、爲頼こらへかね、ついで出て、なう聞きにくし兼好、然らば御邊具覺にまさつて、此御病氣を治すべきか、言はすれば言ふ事と、人もなげなる學文だて、いやはやかたはら痛し、いかに具覺、はやくゝ加持し奇特を見せ、「閉口させよといひければ、具覺壇にさしかゝり、印ことごとしく結び、いらだか數珠をおしもめば、不思議や此數珠ふつと切れ、小蛇となり姫宮の御床にはひ入れば、又絶え入らせ給ひけり、其時兼好からくゝと笑ひ、主なき家には、狐鼻こたまなども入り棲むとや、廣言吐きし六根淨の比丘の本心に主なき故、却て惡靈のやどりとなる、あら笑止やと申さるれば、爲頼いよくゝ急きにせき、



「さあ然らば御邊が手業に除くべきかと云へば、兼好聞き給ひ、ヲ、いかにもく、護摩の法は知らねども某に宣旨あらば、忽ち平癒なましめん」と、詞を放つて申さるゝ、院を初め奉り、さほどに覺えのあるならば、など最前より申さぬぞ、早とくくとの御事也、兼好謹んで承り、其儀にて候はゞ、しばしの御暇給はらんと、御前を立て出てけるが、いかゞ心に思ひけん、立歸り立歸り、あとなつかしげに見送りて涙にむせび出らるゝ、扱兼好は中門まで出ぬらんと思ふ比、御褥の内よりも、小蛇するくと這ひ出て、是までぞ怨靈此後またと來らじといふ聲ばかり残りつゝ、消すが如くに失せければ、不思議や宮の御心地夢のさめたる如くなり、上中下に至るまで、悦び賑ひ給ひけり、かゝる所へ御隨身近友、あわたゞしく參上し、「左兵衛佐兼好發心遂げ、行方しらず罷出て候、則ち烏帽子狩衣に髻をそへ、中門に残し捨て候」と御前にさしあぐる、各驚き御覽すれば、袂に一首を書きつけ、みるみさび江の底の玉藻は亂るとも、知らるるな人に深き心を、院を初め奉り、こは心得ぬ發心かな、功成り名遂げて身

退くといふ事を心得しか、いづくへか行きぬると忝なくも龍顔に御涙しきりなれば、御前伺候の公家大臣、いづれも袖をぞしぼらるゝ、されども宮の御本復まづまづめてたしくと、各暇たびけれども、具覺坊と爲頼には、誰とりあふ人もなく、却て兄弟聞きにく、いさかひ腹立ち出けるを、笑はぬ者こそ三重なかりけれ、扱其後に姫宮は、乳人の裏葉をひそかに召され、有りし次第を語らせ給ひ、皆是わらはが故なるに、兼好が志よそに見んも恥し、いづくまでも尋ねゆき、此恩を報ずべし、必ず人に洩らすな、御身を偏に頼むぞと、涙にくれて宣へば、乳人も哀と思ひけん、げに御道理此上はいづくまでも御供と、忍び出させ給ひしは、いとことわりに三重忝なし、とても濡れたる袖の露、閨の空炷立ち去らて住み果つる習ひならば、物の哀もなかるべし、世は定めなきこそいみじけれ、人の命はかげらふの、春秋知らぬ蟬の羽衣うすくとも、かけし契をたがへじの、情の程どたぐひなき、げにつくづく、一夜定め陸言も、分け來し葉山繁山の、繁き思を語らはゞ、心こよなう慰まん、にくや似氣な

き田舎人、知られず知らぬえびすさへ、世のにぎはひと中人に、誘はれ靡く水草の、ア、水臭き妹背には、たとへ千年を過ぐすとも、果はあだなる夢心地、暗のうつゝかおぼつかない、行くさきわかぬ八重むぐら、茂れる道のうれたきに、鬼一口も恐しく、昔の小笠にはらほろめくは、雨か木の葉か、天の川とわたる船の櫂の雫か、白玉か何ぞと問はん人もなく、誰に心を置き餘る、露にむもれし遺水の、音はりんくく、ちんくくちろりと鳴く蟲も、かごとがましき夕暮に、月の影さへ曇りつ晴れつ、晴れつ曇りつ曇らばくもれ、とても人目を忍ぶにえく、やれ忍ぶにえ、とても今宵は篠薄萩のおとづれ物さびし、峰の松風野寺の初夜、ありし其夜が思はれて、涙を催す折からに、無常の嵐ばうくくさらく、ばつと吹いては、本あらの萩も尾花も打亂れ、靡き合ふ夜の憂き中に、我手枕もいつのいつ双の岡に着き給ふ、親のいさめ世のそしり包むに心の違なく、往ふさ来るさの御物思、げに色好みのわりなさは、かくこそあらめと見る人聞く人、おしなべ皆ぬらさぬ袂はなかりけり。

四段目

かくて其後、花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは、人の世も猶又然り、財多ければ身を守らず、譽は又誹の基、萬事は皆非なり、只此今の一念をいかて空しくなすべきと、終におのれが本意を立て、兼好をそのまゝに兼好法師と改名し、花と雙びの岡のべに、待つこともなき柴の戸の、明かし暮らせし遁世は、心にくくぞ見えにける、かくて姫宮は、昔の細道踏みわけて、爰やかしこと見給へば、住み荒らしたる草の戸の、庭は木の葉にうづもる、篔の雫ならては、露おとなふものもなし、關伽棚に菊紅葉など折り散らしたるは、さすがに住む人あればにと、めのととの裏葉扉に寄り、くさめくといひければ、兼好不思議に思ひ、庭にあり、誰なれば何事を宜ふぞやと問はれける、裏葉聞てさん候、や、鼻乾たる時、かやうにまじなひ申さねば、死ぬるなりと聞きしゆゑ、養ひ君の此頃人にのろはれまします、今もや鼻乾給はんかと、か

くは申すと答ふれば」さて殊勝なる志と、戸を明け見れば姫宮なり、はつと驚き鎖てんとす、宮走り寄りすがりつき、扱もつれなき振舞やと、涙にむせび宣へば、思ひ切たる兼好も、今のあはれに袖ひぢて、誠にかゝる所まで慕はせ給ふ御志ありがたくは候へども、今は某も木の端のやうに成りはてし、伴なふものは見ぬ世の人、過ぎにし方の戀しさのみ詮方なう候と、打ちしほれてぞ申さるゝ、宮此由聞召し、いやとよみづからも今は戀路を思ひ切り、御身が深き志の恩をも報じ、弟子となり、共に佛を願はんため、遙々尋ね來りしと、涙にくれさせ宣へば、扱はさやうにましますか、まづ〜入らせ給へとて、庵へ請じまゐらする、宮は棚なる文どもを取り開き御覽じて、「此頃御身書きしと聞く、つれづれ草とは是ならん」言葉のどけさ、志のやはらかさ、月花に寄せ、和歌によせ、をとこ女の情にかけ、人のをしへ、世の寶、人間常住の氣をいましめ、無常を示す文法は、詞にいかて及ぶべき、さるにても此中に三ヶの大事とて、秘密の仔細ありと聞く、長き世までの形見なり、わらはに許し傳へよと、

いとせちに宣へば、兼好手をうち、から〜と笑ひ、「そも此文に秘傳とは、たが申上げけるぞ、ア、おろかなり淺まし、我道はいふにも足らず、萬藝に秘事するを聞くに、おのれが心に得がたき所を秘事といふ、は何ぞ秘事なるべき、只物の極意は、教ゆるに教へられず、習ふにも習はれず、しかも睫毛の如く、目に有て目に見えず、多年に磨く玉の光、面々心にそなはれば、至て則自然に知る、始終本末間に髪を容れずして、しかも胡越を隔つれば」秘して傳へんやうもなしと、理をつくし云ひければ、宮はつくづく聞召し、げに尤殊勝なり、さりながら盛親僧都が白うるりとは、まづ何事なるぞ、「兼好聞て、さればさるものは我も知らず」伊勢の濱萩難波の蘆、假なる物は人の名と、心をそへて御覽ぜよ、ヲ、げに面白し、又布の帽額とはいかに、扱よく御心かけられし、葵の露の玉簾、よもぎあやめも引添へて、軒端に近き物なれや、猶放免のつけ物や、まかり車の五つ緒の、四つも五つもむつかしや、傳へて聞き學びて知るは、眞の智にあらず、いかなるをか智といふべき、可不可は一條なり、いかな

るをか善といふ、まことの人は智もなく徳もなく、功もなく名もなしと、語り給へば  
 姫宮も今こそ夢はさめたりと、御感涙はせきあへず、かゝる折ふし侍従が姿、夢現と  
 なく現れて、あら恥しや、みづからは應長の比、伊勢の國より現れ出し鬼女なるが、  
 御身おんみ和歌わがの徳とくたけし其本心そのほんしんを掠かすめんため、假かりに侍従じゆうが色いろをなし、心こころを惱なやましかたぶけ  
 しが、まことの光ひかりにけ壓おさされて、いと鬼畜きちくの苦くるみも、只今ただいまの示しめしにて、悟さとりひら  
 なし、あら有難ありがたやと、忽たちまちに忍辱にんにくじ慈悲ひの姿すがたとなり、雲居くもゐ遙はるかに上のぼるゝ、兼好けんこう重ねて、  
 あれ御覽ごらんぜ、「化物はげものなんといふ物も、多くは女の形かたちなり」女をんなの我執がしよ深ふかきこと、其そのしるし  
 を見みせ申まうさん、いざこなたへと夕月夜ゆふつきよ、そとの野邊のべへと出いでらるゝ、扱兼好さてけんこうは懐中ふところよ  
 り鹿笛しかふエを取とりだし、二聲にこゑ三聲さんこゑ吹ふき鳴ならし、「是これはこれ鹿笛しかふエとて、狩人かりうどならては吹ふき難がたく、  
 妻戀つまこふ鹿しかもよらぬなり」扱女さてをんなの履はける足駄あしだにて作つくれる笛ふエのさふらふが、是これは又誰またたが吹ふ  
 いても、必ず鹿しかの寄來よりくるなり、いて御覽ごらんぜよと取とりだし、ほそろくせりと吹ふく笛ふエに、つ  
 れて小鹿せじかのよりくるは、やさしかりける氣色けしきなり、げにや女をんなの髪かみすぢにてよれる綱つなに

は大象だいぞうもよく繋つながるゝと説とく、法のりの教をを常に觀念くわんねんし、執着しやくちやく罪つみの深ふかきこと、能よく思召おほしめし知  
 り給たまへと、いひも果はてぬに、向むかふより、「誰たれとは知らずむらがり來くる、兼好けんこうはつと驚おどろき」  
 宮みやを草くさむらに入いれまゐらせ、上うへには紅葉もみぢちらしかけ、扱月影さてつきかげにすかして見みれば、淺原あさはら  
 判官はんぐわん爲頼ためより、舍弟しゃてい具覺坊かくげぼう、奈良法師ならはふしの兵士へいし數多あまたかりもよほし、兼好けんこうをきつと見て、「やあ  
 それなるは兼かねよし入道にふだうか、先度せんどの意趣いしゆを晴はらさんため、庵室あんしつへ寄よせけるぞ」あれ打取うちと  
 れとひしめく所に、いづくともなく武者むしや二人にん、兼好けんこうが前まへに來きり、爰こゝをば我われらにまかさ  
 せ給たまへと、太刀長刀たちながたをさしかざし、大勢たいせいを引受ひきうけて、花はなを散ちらして三重戰さんじゆひけり、  
 寄手よての惡僧あくそう、いろをし坊ぼう白梵字はくはんじ、暮論ぼろん字じ梵字はんじかんじ坊ぼう、宗徒しゆんたの法師はふし皆打みなうたれ、具覺坊かくげぼう  
 も腰こしきれ損そんじ、今はせん方かたあらざれば、爲頼ためより大きおほに怒いかりをなし只射取ただいらんと弓ゆみに矢やつが  
 ひ、さしつめ引ひつめ、放はなつ矢やを、はらりくくと切拂きりばらふ、今は何をなにか期ごすべきと弓ゆみ投げ  
 捨すてて打うてかゝるを、二人にんの武者むしや驅かけ向むかひ、其身そのみかるげに彼方あなへ飛とび、此方こなたへかけつて、  
 飛鳥ひてぶの翼つばさを並ならぶ羽音はぶねもかくやと、すかさず左右さうよりつゝと寄より、づたづたに切り散ち

らし、僅に残る者共を、四方へばつと追ひ靡け、立歸つて、我らは彼の筑紫の土大根  
 ひとへに信じて、文にも書かれし嬉しさに、現れみつき候と、おのが姿をあらはすと  
 見ゆれば消えて三重失せにけり、かゝる所へ堀川の内府を勅使として、宮御むかひの  
 御ながえをかき来る、又兼好の得道甚だ感じ下さる、條、急ぎ院參あるべしと、各々  
 打連れ參らるゝ、本より賢愚得失の境に居らず、是なる時は是、非なる時は非にして、  
 心にまかする道なれども、道徳四海に儀行して、敷島の四天王、うづもれぬ名を残し  
 ける、末世の鏡は是なり、只此人なるはと、皆仰がぬものこそなかりけれ。

五段目

さる間、とこしなへに違順に使はるゝ事は、偏に苦樂のためなりと、名利を離れ、世  
 をかろき麻の衣の墨染にて、昇殿あるこそ有難き、院めづらしく思召し、玉座近く召  
 され、和歌有職より始めて、萬の道しばし問答ましますに、一としてあやまらず、其

理恰も流るゝが如し、扱こそ和漢の才人、誰かは是にまさらんと、則ち姫宮の御師範  
 として、猶敷島に長ぜらるゝ、宮仰せ上げらるゝは、何そも歌の道廣くして、目に見えぬ  
 物までも、詠ぜずといふことなし。されば月花は宮も葦屋もへだてなし、四季折々の  
 民のわざ、何とぞ見たうさふらふと、御訴訟あれば、院聞召し、さあれば龜山の池に  
 大堰の水をまかせ泉を湛へ、木草を植ゑ、四季をつくらせ申すべしと、則ち兼好指圖  
 にて、四季の氣色をうつさるゝ、折節の移りかはれる姿こそ、げに物毎に珍らしや、  
 一きは心も浮きたつは、まづ初春の朝ぼらけ、一夜隔つと思へども、こぞは遙に遠山  
 や端山もわかぬ薄霞、うづめどかろき淡雪の鹿の子まだらにひま見えて、百千の鳥の  
 聲をも、猶春めきて長閑なる、垣根の小草萌えて、松は五葉の深みどり、梅は白き  
 薄紅梅、定家の卿の軒近き、一重も八重もゆかしきに、ひとくくゝと、鶯の厭ひて鳴  
 くはしほらしや、深山櫻は盛りにて、岸の山吹清らかに、藤のおぼつか波風に、亂れ  
 亂るゝ青柳の、若葉のしげみ涼しげに、山時鳥初音鳴く、橘桂、白く咲けるは夕顔

や、蚊遣ふすぶる伏屋の軒を、うたて水鶏の、ほとくと、叩く妻戸を人な咎めそ、  
 人やせくらんせき入れて、早苗とるなる山川に、鶺鴒の篝かけ暗く、いと暑さも夏  
 刈の、蘆間こがる、棚なしを舟、棹の雫に袖ぬれて、秋かとたどる川逍遙、げにひや  
 かにぞ三重見えにける、あやめ蓮葉杜若、花踏みしだく白鷺や、螢ひろへばおのづか  
 ら我手の内に玉さてや、風こそ薫れ扇網、玉島川にあらねども、小鮎さばしる早瀬川  
 さら／＼さつと掬ひあげ、餘念も夏の短夜は、ア、いとま惜しや、釣竿のふしもしど  
 ろに歌ひつれ、からりころりと沖漕ぐ船も、よなもさこがれ、流るゝ月も早うつり變  
 れる秋風に、霧たちのぼる夕まぐれ、萩の下葉も露深く、紅染むるもみぢ葉に漣の白  
 糸色になる、わさ田おくて田雁鳴きて、野分のあした哀なり、稍弱り行くきり／＼す  
 つよりさせてふ鳴く聲に、ほころびわたる藤袴、菊の着せ綿いとやさし、みのる木の實  
 は、小柑子栗や、小柿に榧香椎、枝うつりする友猿の、紅葉ふみわけ子を思ふ、鴈を  
 斷つ聲までも、取集めたる悲しさに、木々の朽葉はちり／＼はらく／＼はらりと降る霰

汀の氷おし分けて、舟漕ぎめぐり見渡せば、霜の衾はさむけきに、つがひ離れぬをし  
 鳥の、妹背にさはる鶺鴒や、眞砂にねぶる蘆鴨の、緑の翼、白砂の雪折竹の笹の葉の  
 酒あたゝめて盃を、今も流に浮ぶれば、彌生ならねど池水に、巴の字をなせる水車、  
 くるり／＼と舞ひ遊ぶ、鶴と龜との齡にて、幸ひ心に任せたる、めてたき君の御遊や  
 と、聲を揃へて三重ほめにけり、兼好袂を翻し、三行一致の御池の水、本来不色の底  
 深く、汲めども盡きぬ道廣く、教へ始めし最初の佛、來らず去らず、百億萬歳と、袖  
 をかへして謠ひけり、末繁昌の物語、めてたし／＼とて、諸人に語りて興じき。

# つれぐ草

## 解説

〔延寶九年(天和元年)五月上旬、京都宇治加賀椽芝居上演〕  
□作者二十九歳

### (一) 初期時代の幼稚な作

この淨瑠璃は、竹本義太夫が大阪に義太夫節の新しい一流を創唱した貞享二年より、四年以前の延寶九年(天和元年)に、京都宇治加賀椽座の爲に描いた新作である。近松が其初期の作中に、少くも五指に數ふ可き最初の作品として注意されるものである。尤も當時は淨瑠璃作者とよりは歌舞伎作者が本職であつて、其劇壇に名を上

げたは、都万太夫座の爲に藤壺の後の怨霊が藤の花から大蛇に化するといふ珍趣向の、『藤壺の怨霊』を描いた時から。これは延寶五年（作者二十五歳）のことで、近松の處女作（？）だとある。翻つて淨瑠璃の方面を見ると、その處女作は未確定ではあるがこの作の前後に『弘徽殿嫉妬打』、『大原問答』があり、『戀塚物語』があり、同八年には『赤染右衛門榮花物語』、同九年の正月には『東山殿子の日遊』があり、同年五月には即ちこの作『つれづれ草』が生れて出たことになる。以て其初期時代に於ける近松の筆意を窺ふには、本作の如き蓋し恰好の資料と云うことができる。

一編の文章の様式は、言うまでもなく古淨瑠璃の型に嵌つてゐて、『扱も其後』さる程に『歸らせ給ひける』『感ぜぬ人こそなかりけれ』式の口吻を襲踏してゐる。作柄も亦常套の物語風に運ばれてゐる。別に取立て、云うほどの作品ではなく、凡作の部に入る可きものであらう。尤も當時にあつては、構想よりも脚色よりも、只

管文章の妙筆致の巧を第一義として描かれたのであるから、全編中にも景事道行の條に最も作者の苦心が拂はれて居るやうである。即ち、序段の『花盡し』三段目の『菅の宮道行』、五段目の『四季の景事』などは、筆勢流石に凡ならぬ光彩を放つてゐる。要するに舞臺に觀せるためよりも讀ませる爲めの方に近い淨瑠璃だと云つてよい。

## (二) 兼好『つれぐ草』の文章と本曲

此作の全體を通して觀て、誰が目にも直ぐに合點さるゝ傾向は、その大概が兼好法師の『つれぐ草』の文章を以て満たされて居ることである。外題名に採つたに、それは寧ろ自然の趨向ではあるが、曲中大に兼好を謳歌し、この隨筆の著述を讚美し、文中の疑義を辯疏し、兼好の主張を力説するなど、實に努めたものである。兼好法師の爲め、又、つれぐ草の爲には此上もない好個の宣傳淨瑠璃と云ふてよ



い。それ故、行文の一句一節にもつれづれ草に據り所のある來歴を持つものがあり。脚色された事件、登場の人物は云ふに及ばず、背景、言説、挿話、引證等に至るまで、多くこの隨筆から材料を採つてゐる。それが相當煩はしいほど多量に引用されてゐる、恰もつれづれ草の原文を、淨曲に翻譯したやうな觀がある。

今、兼好のつれづれ草から本曲に採用されたものを、一段目から順序に拾ふて行くと、實に左の通りの多數に上つてゐる。

- つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて云々(本文一段目の冒頭起筆)
- 久米の仙人のこと(同上)
- しのぶの浦、くらぶの山(同上)
- 竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞ(同上)
- 程につけつゝ時に遭ふ(同上)

- 牛飼の齋王丸のこと(同上)
- 牛に分別なしの話(同上)
- 時鳥いかゞ聞かせ給ふぞ(同上)
- 下戸ならぬこそ男は云々(同上)
- 色好まざらん男は(二段目)
- 顯基の中納言罪なくて見んと云ふ配所の月(同上)
- 露こそあはれなれ(同上)
- 吳竹は葉細く河竹は葉廣し(同上)
- 梅の花からうばしき朧月夜云々(同上)
- 高名の木登り(同上)
- 女の性は皆僻めり云々(同上)

- 飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば云々(三段目)
- 興薬の頭敦重入道醫師忠盛(同上)
- 命長ければ恥多し云々(同上)
- 具覺坊の失敗談(同上)
- 阿字本不生の虚空界(同上)
- 赤舌日といふこと(同上)
- 四部の弟子のこと(同上)
- 思ふこと言はねば腹ふくる(同上)
- 主なき家にはの條(同上)
- 御隨身近友(同上)
- 立ち去らて住み果つる習ひ……げにつくくと一夜定めの睦言(同上)

- にくや似氣なき田舎人云々(同上)
- 花は盛りに月は隈なきをのみ見るものは云々(四段目)
- 萬事は皆非なり(同上)
- 苔の細道踏みわけて云々(同上)
- くさめくさめの話(同上)
- 木の端のやうに云々(同上)
- 盛親僧都が白うるりの話(同上)
- 布の帽額のこと(同上)
- 葵の露の玉簾よもぎあやめ云々(同上)
- 放免のつけ物(同上)
- 傳へて聞き學びて知るはまことの智にあらず(同上)

- 應長の頃伊勢の國の鬼女の話(同上)
- 女の履ける足駄にて造れる笛のこと(同上)
- 女の髪筋にてよれる綱(同上)
- いろをし坊白梵字暮論字梵字かんじ坊(同上)
- 筑紫の土大根の靈妙談(同上)
- 堀河の内府(同上)
- 違順に使はるゝ事(五段目)
- 折節の移りかはれる姿云々(同上)
- 定家の卿の軒近き云々(同上)
- 水車云々(同上)
- 最初の佛の話(同上)

(三) 近松の藝術觀と『つれづれ草』

以上の如く、本作は殆んど兼好のつれづれ草を土臺にして、其うちから適宜の材料を拾ひ出して組み立てた、寄木細工のやうな觀がある。それだけに近松が青年期には、餘程つれづれ草を愛讀し、多大の信仰と憧憬を持つて居たらしいことが想像される。少くも『つれづれ草研究者』『つれづれ草學者』を以て任じて居たらしい。

一説によると、堺の夷島にて、榮宅と呼ぶ人と一所になつて、『つれづれ草』の講筵を開き、兎角言ふ世上の批難を意に介せず、大に『つれづれ草』を揮り蒔ひたと云ふことである。後に、寶永三年には、彼の『忠臣藏』淨瑠璃の最初の試みてあつた『兼好法師物見車』の著作にも、その外題名の示す通り、曲中に兼好を點出し、卿の宮菅の宮の異名同人を出し、侍従を出し、兼好の『つれづれ草』の文章を多く採り

入れてゐる(『兼好法師物見車』の解題参照)。と云つた風に、近松は當時盛んに『つれづれ風』を吹き立て、得意であつたものと見える。

更に進んで近松は其青年期に於て、彼れ自身の思想の上にも、確に『つれづれ草』の影響を享けつゝあつたことは否まれぬ事實であると思はれる。彼が多くの戯曲の作意に付て考へても『つれづれ草』が齎らした、出世間と通俗との並存、靈と肉との對立、と云つたものから胚胎して、眞實と空想と、所謂『藝術は虚實皮膜の間にある』と云ふ、その藝術觀樹立に、尠からぬ關係が存して居たやうに考へらる。凡そ元祿期の文學は、中古近古の文學から獲るところ多かつたことは言ふまでもないが、特に『つれづれ草』の影響は著るしく現はれてゐる。俳界に正風を唱へた芭蕉、新に浮世草紙を創めた西鶴の如き、孰れも熱心な『つれづれ草』愛誦家であつたから、これから獲得した思想感情は、蓋し大なるものがあつたと云ふを憚らぬ。近松と云ひ

芭蕉西鶴と云ひ、元祿文藝界の三頭目が、いづれも『つれづれ草』の好讀者であつたことは興味深い現象ではないか、とりわけて近松は最も深い憧憬者であつたのである。

#### (四) 兼好の徒然草の思想と近松及び其評語

第四段の冒頭に、つれづれ草の本文を借つて來て、『花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは、人の世も猶又然り、財多ければ身を守らず、譽は又誹の基、萬事は皆非なり、只此今の一念をいかて空しくなすべきと、終におのれが本意を立て、兼好を其まゝに兼好法師と改名し……明かし暮せし遁世は、心にくしぞ見へにける』と置いたのは、兼好が抱ひて居た老莊の思想を叙べたものである。毀譽得失、盈虚常なき人の世、萬事は皆非である、『只此今の一念をいかて空しくなすべき』と云つ

た思想は、我に強かつた青年期の近松の、最も共鳴したところであつたに違ひない。それなればこそ「……心にくしぞ見へにける」など作者の主観をほのめかしてゐる。實に近松の青年時代は、好んで舞臺裏に起つて道具を直したり、誰れも行ひ得なかつた作者名を麗々と其作に署名し始めたり、大道に徒然草の講義を試みたり、世間の批難褒貶を心に留めないて、信ずるところを斷行したことは、「只此今の一念をいかて空しくなす可き」の張り詰めた意氣の表現であつたのである。

次に兼好が、世間の所謂「秘事」に付て其蘊蓄を吐く條がある。作者は兼好をして言はしめて曰く、「萬藝に秘事するを聞くに、おのれが心に得がたき所を秘事といふは何ぞ秘事なるべき、只物の極意は、教ゆるに教へられず、習ふにも習はれず、しかも睫毛の如く、目に有て目に見えず、多年に磨く玉の光、面々心にそなはれば、至て則ち自然に知る、始終本末間に髪を容れずして、しかも胡越を隔つれば、秘し

て傳へんやうもなし」と説かしめてゐる。次に又「傳へて聞き學びて知るは、眞の智にあらず、いかなるをか智といふべき、不可は一條なり、いかなるを善といふ、まことの人は智もなく徳もなく、功もなく名もなし」と、莊子齋物編の不可説を述べしめてゐる。或は又、鬼女が悟を開ひて天に登るを見て、「化物などいふ物も多くは女の形なり」と言はしめてゐる。

作者は又菅の宮をして、兼好のつれづれ草を評させた語に「言葉のどけさ、志のやはらかさ、月花に寄せ和歌によせ、をとこ女の情にかけ、人の教へ世の寶、人間常住の氣をいましめ、無常を示す文法は詞にいかて及ぶ可き」とある、これやがて作者の評語であつたのであらう。

(五) 土大根の精、四季の段の競作

第四段の詰に。兼好が淺原判官や奈良法師の群勢に圍まれて、既に危く見えたところへ何處ともなく二人の武者が現はれて、兼好に助勢をなし、非常の働きをなして敵を八方に打散らす。この二人の武者とは、實は兼好のつれづれ草に表彰して書かれた、筑紫の土大根で、兼好の筆に描かれた文徳に感激して、假に武者の姿となつて、難を助けたのである。「我等は彼の筑紫の土大根、ひとへに信じて、文にも書かれし嬉しさに、現れみつき候」と云つてゐる。土大根のつれづれ草の叙述を、兼好の助勢に活用して仕組んだのは面白い。

第五段の全部は、新院のお好みによつて、龜山の池に大堰の水を引き泉を作り花木を植え込み、則ち兼好が意匠にて四季の情景を作り上げたのを、御覽になる條である。「折節の移りかはれる姿こそ、げに物毎に珍らしや」に始つての長編の美文である。これは兼好のつれづれ草の有名な文章「四季の段」の向ふを張つて、近松が競

争的に書いたものであらう。行文さすがに麗妙、才氣に満ちた筆力を窺ふことが出来る。趣向は甚だ拙いが文章は勝れてゐる。即ち文藻を第一とし、構想を第二とした當時の傾向が能く現はれて見へる。

本作の最終の文「……教へ始めし最初の佛、來らず去らず百億萬歳云々」とあるは、「つれづれ草」の結末にある兼好が七歳の時父と問答した第一佛の話に由つたものである。かくて最初より最終に至るまで「つれづれ草」を以て充たし、結尾も同じ「第一佛」の話で以て終つてゐるは、初めあつて終りあるものであらう。

#### (六) 兼好法師と其著つれづれ草

本作の主人公兼好の略傳を老婆心の餘り附記して置く。兼好は卜部氏、兼顯の子第九十一代後宇多院の北面の臣、從五位上に叙し佐兵衛佐に補せられたが、天皇崩

御の後、京都東山吉田に閑居して、字名を法名とし、吉田の兼好法師と呼ばれ、後洛西なご又が岡に隱栖し、多く諸國を遊行したとある。天臺の學に通じ老莊の道に深く、和歌を善くし頓阿淨辨慶運と共に、當代の和歌四天王と稱せられた。「つれづれ草」は彼が生涯の心血を濺ひだ思想感情の結晶であつて、我が文學史上著名の逸品であることは言ふまでもなからう。兼好は弘安五年に生れ、觀應元年（正平五年）二月十五日伊賀國々見山麓、田井の庄の地に、年六十九歳で歿した。

(七) 古式院本読み方の注意、「詞」「地」の區別

本作の本文中、詞ことば「」の符號に包まれた箇處は、後の院本の詞ことばと稱するものとは違ひ、實際舞臺上にて太夫が三味線の彈奏なしに語る部分を示したものである。（獨り此作に限らず初期時代の院本の、詞、地の區別は斯の通り）それ故に、後世に稱す

る純粹の對話だけを指すのではなく、動作に屬する部分も「詞」のうちに籠められる場合が普通にある。畢竟、詞と地の區別は、太夫の舞臺上の實際的便宜の爲に設けられたものであつて（他の節、ヲクリ、三重等の符號と同じく）、單に三味線の伴奏の無い部分を示したものと思へばよい。換言すれば、初期時代の院本は、語る太夫の爲め、舞臺用實際的必要の爲に設けられたもので、読み物用として作られたものではなかつた。故に誤字、あて字の類の夥多しいのも止むを得ない。

清十郎 五十年忌歌念佛

上之卷

序詞通ひ車は、小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は、斑女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平の言被り、柏木の鞠山路が笛、古今其品かはれども、皆これ戀路の寄櫃根太も根強き門柱、その但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋、笠がよく似た菅笠の雫積りて戀の淵、湧きて流るゝ和泉の國、水間の里の佐治右衛門、畠作の田烏や、鶯が産んだる高給取の、手代は主の代をも、清十郎といふ子を持つて、老の入前暮し好き、正月着物播磨湯、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も三人連の木賃宿、明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所々々は大坂の、娘子達に、交りても、打てず押されず手入らずの、田舎生のおぼこにも、父の乗りたる便船の、印は如何に



船綱手線着いたぞ日は傾く、いざ急がんとちよこ〜走り、とつ川口にぞ着きにけ  
 る、親佐治右衛門苦打上げて、「ヤアこりやく〜此處ぢやく〜、ハレやれ〜大膽な、  
 暮れるまで大阪の町をぶら〜と、女の身にて何事ぞ、昨夜も東の横堀で、男と女子  
 と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たを、幾はなか見て来た、扱になりし  
 やら、錢をついたも慥に見た、大阪の喧嘩は大方相場は極つて「十文ては事が済む、  
 喧嘩は降物、和御寮達萬一の事があつたりとも、いかな九文半錢でも、堪忍はしめさ  
 るなと、眞顔に言ひしも殊勝なり、「二人の娘打笑ひ、さればいの、今日も一日芝居見  
 て、それから此處の川口の、八景とやら見物して、ツイ今になりしとて「船に乗れば  
 佐治右衛門、草履菅笠片付けて、先々休みやといふ處へ、向の船の船頭來り、「和泉の  
 國の佐治右衛門殿はこの船にか、此方の船の乗手衆が、チトお目に懸り度い、播州姫  
 路但馬屋の勘十郎といへば、合點ぢやげなとぞ申しける、佐治右衛門聞きもあへず、  
 ヲ、知つた〜、但馬屋の勘十郎殿、私が息子の朋輩衆」參つてお目にかゝりませう

と上らんとする處に、是へ見えしと勘十郎、なんと〜親父殿、「さても年も寄らぬは、  
 不思議な處で逢ひました、先御無事にて一段、清十郎も息才で、商の用事にて此處へ  
 上りしが、はや下つたも存せず、旦那も折々噂なり、何故に見えぬといひければ、ま  
 い勘十郎殿様お久しう御座ります、嫁子共が申すにも、親父ちと旦那様へ往かつしや  
 れ、何かのお禮も申さつしやれと申します、ヨ、〜とは申しながら、正眞の貧乏  
 際なし、物作の事なれば、いや大根時の綿時の、瓜を蒔くは茄子を作るは、午芳島豆  
 島、粟よ黍よ藍時よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ、田を植ゑては草を取る、穂が出れば刈り  
 まする粗になれば磨りまする、米になれば炊きまする飯になれば食べまする」何ぢや  
 下だ居る間とてなく、御無沙汰とこそ語りけれ、勘十郎打首肯き、「尤々、何方も隙は  
 なし、して此船に乗つて何方への下りぞといへば、先旦那へ春の御禮も申し、清十郎  
 にも逢はんと存じ、これは妹お俊、彼は行くゆく清十郎が留守をもさせんと存じおさ  
 んと申す娘分、連れて姫路へ罷下る、迎もの事に御同道致さんといひければ、イヤこ

れ逢ひたいといふは其事よ、まづ下る事は入らぬもの、清十郎が沙汰を聞かれぬか、さて、氣毒笑止な事、旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱いた様になる、それに龍野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出来揃ひ、身共が道具を請取つて、下り次第の嫁入、彼の腹の土産物掣から詮議があるは定、否でも照ても清十郎は片假名のキの空で此様に手を廣げ、引張風は知れた事、親兄弟も同罪なり何卒嫁入の無い先に、身を退く思案がさせたさに知らせますと威しける、親は在所の律義者何の企みのあるとも知らず、ア、お前は如來様、内々如何やら承り氣遣いたせし折柄なり、朋輩の好誼とて御知らせ有難し、年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで、一人の忤が木の空で、引張風になるのがそもや見て居られうか、忤が命助かる様に御思案頼み奉る、さりとは誰に似て、下心の悪い忤めと、何處で聞いてかいつこと、泣いて口説くぞ哀なる、時に船場に案内して、姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお船は是か、難波橋の蒔繪屋誂のお道具、今宵船に積まんと存じ、銀子請取申さん爲参りたり

とぞ言入れける、あれ親父聞いてか、銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入がある、嫁入があれば清十郎は引張風、なんと此處が談合、身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出来さぬ分て濟し置く、あの道具屋の手前は親父から、百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延びる、延びさへすれば清十郎、隙を取らうと走らうと、この勘十郎請取つた、此處は親父太儀ながら、八貫目なんぞいの、田地賣つても子の爲ぢや、出したがよいと言ひも果てぬに佐治右衛門ぎよつとして、エ、御前様は一口に八貫目、假令清十郎引張だこにならうが鹽鮭にならうが、世が泥の海に成るとても、一文も銀は無い、エ、此方は皮か身か、合點が往かぬと顔顰め、立つて入るを引留め、それは親父廻氣な、然らば銀も入らぬ思案がある、彼の蒔繪屋に向うてこの娘には構あつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた、銀渡したら拵てあらうと、一言いへば濟むぢやが、成るまいかと言ひければ、ハテ金さへ入らぬ事ならば、我子の爲ぢや申さいてはと表の間にぞ出てにける、播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を請取つ

た蔭繪屋は此方か、身共は和泉のどん百姓、土掘せりておぢやれども、但馬屋のお夏には此方に先の構ひがある、外の男を持たせぬからは、嫁入道具を押へた、勘十郎殿先刻にから切羽脛金する通り、金渡したら御損であらう、斷つて置いたぞと苦りきつてぞ申しける、蔭繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ悪い工面ななされ様、これ娘に構ひあるならば、それは先との詰開き、此方に構はぬ事、如何ても是は廻者、近頃悪い仕方といへば、ヤアなんぢや廻者、オ、男ぢやもの禪をせいでよいものか、若い時は小相撲の一番も捻つたおれぢや」男につがふ詞がある、禪かいたかかぬか、來い見せうと裾褰げ、胸を叩いて力身ける、蔭繪師も聞かぬもの、片肌脱げば二人の娘、船頭船方居合せまづ堪忍と取付きける、勘十郎も分け入りて、種々宥め押沈め、「塗師屋殿も悪い合點、道具は其方の、銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らうといふにこそ、其方と我とにあの仁から、一筆取つて置くならば、我も旦那の手前が立つ、其方も下細工へ手間遣らいても大事なし、身に任せて黙つて居や、これ親父、なんと一筆召され

うか、ハテお前の御了簡ならば如何なりとも、それおさんお望み次第に書きやといへば、勘十郎立寄つて、但馬屋のお夏祝言につき構ひこれあるにより、嫁入道具押へ止め申す所件の如し、但馬屋勘十郎殿、蔭繪師權之丞殿、清十郎親、佐治右衛門と、好む通に書きければ、親は悦び巾着明け、墨黒々と捺したりし因果の程ぞ不便なる、一札巻いて勘十郎、懷中にしつかと收め、サア埒は明いた塗師屋殿、萬事は國より一左右せん、先お歸りといひければ、塗師屋は船中一禮し、辭儀を述べてぞ歸りける、なう親父殿、この勘十郎が好い時に居合せて、此方親子の仕合せ、道具さへ下らねば祝言は延引、その中には清十郎、隙を取らうが走らうが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ、この舟今宵出づると聞く、然らば是にと乗移り、方々此度下つては、清十郎が爲にも悪し、好い時分に便せん、その時必ず待入るぞや、數年馴染の清十郎、悪い様には致すまじ、いづれもさらばと言ひければ、親子の者は船より上り、手を合せ涙を流して、朋輩の好誼とて有難し忝し、生の親の我等より、清十郎めが命の親、嫁

も娘もやれ拜め、辨へもなき清十郎、弟とも下人とも思召して御意見なされ、美しく  
 お暇取り、再び在所へ来る様に、偏に頼み奉ると敵と知らぬ愚さの、親の情は子の爲  
 に薬といへど是は又、毒を合する佐治右衛門、心は律義一ぱいに、煎じ詰めたる水間  
 の里、船は別れて三重下りける。

中之巻

所さへ戀知り顔に姫路とは、何時名づけしぞ但馬屋の、お夏が父は九左衛門、國一番  
 の米問屋、有銀箱も十づつに、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かゝる親には似  
 ぬ娘、お夏は深き濡れゆゑに、菩提心と意地張て、嫁入も丈も延びくの、それも戀  
 する氣の前か、二人の親の顔までも、飾磨の榻地播磨湯、國に浮名や立ちぬらん、  
 今日ば蚊帳の祝儀とて、萌黄の生絹六品七品、屋の内祝ひ賑へども、お夏は更に氣も  
 染まぬ、心の内の緞子の蚊帳、色香を外に漏さじと、ア、おりや風引いたさうなとて

涕打ちかみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる、心を知らぬ腰元共、お夏様と聲様と、こ  
 の蚊帳でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかる、此方は蚊帳は及びもない  
 せめて嫁入の紙帳なりと、あやかりたいと口々に、申しお夏様、新蚊帳の御祝儀、少  
 浮きくとなされませ、賑かに酒盛して、謠ひませうと言ひければ、ア、何をさばく  
 しやるぞい、蚊帳が出来やうが紙帳が出来やうが、この氣合で今やなど、嫁入する  
 氣は微塵もない、あつたら手問てあの蚊帳を、生絹の衣にして着たい、只無常氣で可  
 笑しらないと、後を見れば父親は、内手代の源十郎に、帳を讀せて算盤の、つぶく  
 言やんな喧しい、先來て祝やと赤飯の、怖い目付は我戀を、知つてさうなと百千に、  
 碎き破つたる胸算は、いかな算者も及ばじな、斯る處へ清十郎勘十郎同道してぞ戻り  
 ける、九左衛門悦び、ヤア好い處へ戻つたは、今日はお夏が嫁入蚊帳の祝、この拍子  
 ならば、大阪の仕合もよかるといへば、清十郎庭に立ちながら、旦那の病になされた  
 中國北國残らず賣つて、爲換手形濟みました、利合は高て貳拾四五貫目と、目を合す

二人が中無事な顔見て嬉しいと、心に言はせたり、九左衛門上機嫌、お手柄お手柄お夏が嫁入はたゞ出来た「扱なんと勘十郎、蒔繪道具も出来つらん、跡から来るか如何ぞと言へば、お道具も出来致し代銀残らず渡し、職人の手前は濟みながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬと、言ひも果てぬに九左衛門立腹し、それは如何ぢや、餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具、止められう覺は無、惣じてこの祝言お夏が氣色に日限延び、漸此度脇まで詰め今日明日となつて、道具が出来ぬなんのとてこの嫁入が延ばさりよか、世間からは道具渡さぬと評判せん」それに浮々銀渡し素手で戻るといふ様な、子供遣つたも同然と、算盤の割れる程疊を叩いて叱りける、勘十郎迷惑さうに、御立腹御尤、拙者もぬかりは致しませぬ、證文をお目につけて、密な處でお物語り致し度い事御座るといへば、オ、言譯あらばサア聞かす源十郎も来て聞け勘十郎此方へ来いと、打連れ裏の小座敷へ苦い顔して入りけり、清十郎奥を見て、ハア、餘所には嫁入があるさうな、此方や洗足でも致しませう、や

アえいと沓脱に腰を懸ければ、お夏つかく走出て、「又ぬすり言はつかり」同じ口で可愛やといふ事がならぬか、意地の悪いと抱き付き、戀には涙脆いぞや、「清十郎は懐手、ア、思へば阿呆な者、身の正直な勝手して人の詞をまん誠に、世間の奉公する者は、わざ／＼隙を貰うては春は親に逢ひに行く、この清十郎は親里の近所に十日二十日逗留しても、親の所に許嫁の女房分があるゆゑに、これに逢ふと思はれては心中が立たぬと思ひ、親へ便もせず歸る」是に懲りようさい坊、ほんに孫子に傳へても主の娘と懇など、駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、阿呆なと舌打してぞ頭掉る、お夏涙を押拭ひ、其方とわが身は實事にて口舌などする挨拶か、此度の祝言を好きこのんだる事でもなし、知つての通り、母様は室の女郎、今の内の母様に、あの弟が出来るまでは、我も室で育ちしゆゑ、「母方が悪いの、傾城の風があるのとて」何處の嫁にも嫌はるゝ、これぞ好い事幸ひと、猶女郎の風を似せ人は隠せど我は只、母様は傾城と、一季半季の者にまで觸れ廻りたる村時雨、縁にはつかじと願ひしに、「彼の龍

の阿呆頼、敷銀に目がくれて嫁に取らうと嫌らしい、此お夏ばつかりは言うた事を違へるか、恨もつらみも後を見て言うたが好い、惣じて和方もこんな時、どうなされかうなされの、主待遇が聞えぬ、私から詞を直させよう、なう此方の人此方向んせと袖口から手を入れて、ほとく叩いて抱きしむる、清十郎四邊を見廻しコレお前に聞えぬ事がある、この袖下は何事ぞ、若衆の前髪女の脇詰、男が知らいて立つものか、出来ぬ仕方と言ひければ、なう其處邊を忘れるお夏てなし、ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫うたれど、祝うて我も縫はんとして、片袖ばかり縫ふ顔して、是が嘘かと帯解いて、上着を脱げば右左、振と詰との片違に、片枝は舊片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯ぞ仕立て、着せまほし、清十郎は身を擲ち手を合せ、涙が翻れて忝し、それほどに此男を不便と思召さる、かや、冥加に盡きん勿體なやと、取付き拜めば手に縫り、女房を拜む事かいの、是程思ひ合うた中、何故に女夫になられぬと、辛氣泣きにぞ泣き居たる、ヤア申しお夏様、いつぞやお前に借りました、七

十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし、朋輩の勘十郎、私商に打して、平一頼むと申したゆゑ、取替へやらんと存せしが、思ひも寄らぬ仕合して損を埋めしと途次の咄、もう入らぬ金子なれば戻しませうといひければ、ア、好いはいの、婆々様の讓の金、如何しても大事な、人の來ぬ間にあの蚊帳の、開眼をせまいかと、こはく、顫ふ春風も、人目を忍ぶ緞子の蚊帳、蚊帳はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手かと戯れかはず手枕も、心せはしき契なり、内手代の源十郎、お夏様、旦那の呼ばつしやると出てけるが、はつと廣げし手も打たれず、呆れて立てば清十郎、お夏が棲を引被ぐ、お夏騒がず袖にて隠し、これ源十郎、其方も男ぢや引かせはせぬ、忍んで逢ふは清十郎見通しにして給らぬか、沙汰をするなら爲ると言や、幸ひ双物も此處にある、直に二人が死ぬるまで、サア助けてたもるか殺しやるか、屹度した誓文で承らうと弱身を見せず、責付けられて源十郎、沙汰して私徳もなし、商冥利穩密なり、偽ならば各より私が先に、清十郎が脇指にてとゞめを刺さる、法もあれと、言捨て歸るその舌も

引入れず寄親の、勘十郎に打明けて斯と語りし不實さよ、二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息をつきも敢ぬに親手代ばらくと走り出て、お夏が小腕引出し、清十郎も這出づれば、その儘居れ、身動きせば男共撲ちのめせと取廻せば蚊帳の内につきくと、晝の螢の影消えて籠に窺るゝその風情、外にお夏は夏の蟬聲の限りを泣き盡くし思を比ぶるばかりなり、親は腹立涙にて、「やれ女郎奴、おのれが母は流の者、空言に身は混れても、心のたまかさこうたうさ、千人にも稀なりしぞ」何時慣うてその徒事、遊女の腹とて何方へも厭に嫌ふは聞きつらん、その袖下は何事ぞ、左様な事をせんよりも、おのれが額に傾城の娘と、何故看板は打ちをらぬと、齒切をしてぞ泣きけるが、「やい丁稚奴、不義一通は免もあり、十一の年から子同然に育てし奴、事によらばお夏奴とひとつにせまいものでもなし、在所の親奴と言合せ嫁入道具に邪魔を入れ、親方に恥かかせ但馬屋の家を覆さうと企んだな」口の明かれぬ事見せんと證文出し、これ見たか、おのれの請狀にある親奴が印判、妹とやら厭とやら

が文とも合せて吟味した、芥子程も違ひなし、覺があらうあらふがな、主の寝首を掻かんと知らず、エ、憎やと蚊帳越に額を三つ四つ喰はせて、涙を翻し怒りける、清十郎はつと驚き、親の印判妹の手跡とはいひながら、親にさへ逢はぬ身が夢程も覺なし、「在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様」勘十郎奴何處に居る、言はせねば堪忍せぬと、蚊帳より出づるを取つて押へ、「ヤレ勘十郎源十郎はこの九左衛門が兩の眼の代をする、その手代が穿鑿して一札取つたに胡亂があるか、暇をくれた、出て失せう、こりや女子共男共」彼奴が這出に着てうせた布子があらう尋出し、引剝いて着せ換へ追出せとぞ喚きける、お夏は斯る有様を目も當られず涙にくれ、言はゞ我身も遁れぬ科、餘りといへば親ながら無得心なるお心や、人の譏も思召し少しは宥免あれかしと、聲を揚げてぞ泣き居たる、「ヲ、惨いも辛いも知つたれども、おのれが母の遺言に、傾城の娘とて侮られうか淺間しや、未來のさはりはこのみと返すくも歎きしに、氣遣ひするな好い婿取つて、名を揚げさせうと請合ひしを、嬉しさうに打笑

ひ」それで成佛々々として、死んだ顔容忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を教唆し、惑者になしたる恨み、但馬屋の九左衛門は胴慾者慘い者と言ねば、亡人の位牌に對うて言譯ない、胴慾者には誰がなせしとわつとばかりに堪へかね、咽せ返りてぞ歎かるゝ、其間に下部共衣裳を剝いて振袖の、汚れし綿衣に着せ換ゆれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子とうど顛ひ、二目とは見られぬ容貌、お夏は我も一所にと、飛付くを下女腰元、引分け宥め教訓し、常の部屋にぞ伴ひける、父は彌腹を立て、勘十郎は何處にある、何に恐れて引込むぞ清十郎奴が入物吟味し、衣類諸道具押へ置き、追出せ〜と言付け奥に入りければ、心得ましたと勘十郎、半櫃箆筒昇出させ、ぐわらり〜と打明けて、衣類引出し取散らすは、三途川の褌衣婆の苦責も斯やと哀なり、錠前を叩き破り提物善換取出せば、包の小判七十兩、これは扱、この金子はお夏様へ祖母御よりの讓の金、身が包ませて覺ある、極つた大盗人、首のあるは旦那の慈悲、叩き出して追拂へと手足を取つて引出す、清十郎大聲上げ、ヤイ勘十郎

盗人する男でなし、おのれが私商ひに赤穂鹽買うて損をして、首緘らねばならぬ首尾どうぞと談合したるゆゑ、お夏様へ申しておのれに貸す爲預つた」戀する者の因果て朋輩の機嫌取り、追従したが身の仇となつたるか口惜しや〜おのれが損は入れ合せ今は銀も要らぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずにおのれが引込んで、我親騙つて一札させ人を損ふ工面とは、鏡にかけて知つたれども、相讀なければ是非もなし、是を見よ清十郎は破れ布子一枚で「非人の體にはなつたれども、心の内は紗綾縮緬、錦より潔い、エ、辛いぞや、やれ恨めしいと、齒嚙みをなして泣きけるが、旦那にさら〜恨はなし、十一歳の彌生の花いろはともちりぬるとも、知らぬ者の是程まで、算勘商賣讀書の、硯の海より山よりも、優つたる御高恩、拳一つあたりぬ身が、如何なる月日か今日の今日、主従の縁切るゝ、如何なる神の咎めぞや、今一度旦那の顔拜せ〜と駆入るを、情なくも男共手取り足取り大道へ追出し、門口はたと願しけるは詮方もなき三重次第なり、まだ二月の朧夜や涅槃の雪の名残の門、立留り



つ立去りつ凍え狼狽へ佇めり、無惨やお夏は魂も、布子の袖に入るばかり、身は脱売の力も切れ、若やと部屋を忍び出て、門の戸明けてそつと出て、四邊を見れば人影のお夏様か、此處にかと、言ふより先に抱き合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付きて忍び音に泣くばかりなり、今の間の物思ひ、ま一度逢はせ下されと、幾許の願を掛けたり、清十郎の清の字なれば先此處の清水様、京の清水室の明神、書寫山伊勢の御神様、住吉様金比羅様、不動愛染大師様、拜み頼みし験にて、顔を見て有難やサア二人連にて立退きて如何なる遠國小借屋ても二人遣ふを一人遣ひ、一人遣ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし、いざ立退かんとありければ、「いやそれでは、情の親方の憎しみも増るべし、在所へ歸り親共と勘十郎奴が善悪糺し、身の垢脱いて詫言せば、御機嫌も直るべし」それまで辛抱遊せと泣くく宥め慰むれば、戀しゆかしは身の氣随、男の爲には憂苦勞厭はずながら只一人、突放して遣れうか、「これ此小袖と脱換へて、其布子を逢ふまでの形見に着んと」涙ながら互に帯解き身を合せ、片袖づ

つを脱換はず、肌陸じき志、戀路ならずば何故に、生れて知らぬ木綿物、服紗の衣と引締めて、顔と顔を見合せて、わつと泣入る心底に萬の涙籠るべし、物にて顔を押し包み、さらばやといふ處へ、腰元下女共、お夏様御座らぬ裏よ井戸よと密語きしが、門口明けて、こりや此處にちや、「ア、申しお夏様、お前は悪い合點な、何方の爲にもならぬ事」先御入と衣裳をしろしに清十郎を取巻き、連れて内に入りけるに、お夏様續いて入らんとす、これ清十郎殿、「お夏様がいとしくば先往んだがよいはいの、男の様にもない人ぢやと」恥しめ突出し押出し、大戸をはたと鎖しければ、清十郎は詮方なく部屋へ入る體にして、大釜明けて身を縮め、そろりくと忍び入り中より蓋をぞ閉めにける、お夏は門に撞れて、入るべき便を待つ處に、「炊婦の玉はそろく」と門口明けて、なう清十郎様清様とお夏が袖を慥と取り、「ア、此方は戀知らず、私が此方に絆されて御主様を袖になし、朝晩に心をつけ眞ぞ思ひを盡せども、お夏様に心中立て一度も靡いて下されぬ」恨の焔火吹竹、七や十四五すつとんとんと撲ち度いが、ア、い

としいが因果の種、人は零落の志、コレ此あもは正月の在所へ遣うと思へども、君  
 に何が惜からん、恥しながら此玉を喰ふと思つて賞翫して下さんせと懐に押入る、  
 お夏は色を知らせじと、じつと抱付き締めければ、ヲ、ぞつとするほどお嬉しい、恨  
 みの雲も晴渡りこれて千倍々々、とてもこの事に盃せう、酒取て来ましよと入る跡に引  
 續いてつゝと入り、部屋に駆込み夜着引被ぎ身を顔はしてぞ臥し居たる、清十郎は斯  
 とも知らずお夏は外に如何ぞと、釜の蓋明け見廻せば、奥には人も寝入ばな、勘十郎  
 は親方と寝酒の相伴ひよろ酔ひて、夜着蒲團引出し常の所に臥しにけり、跡より又源  
 十郎、これも微酔ひ来りしが、勘十郎もう寝たか、ちと談合ある目を覺せと、頬杖し  
 てぞ寝轉びける、いや寝入りはせぬ、サア話せと夜着の内より煙草盆、寝ながら行燈  
 引寄せて、顔を並べて語りける、源十郎小聲になり、其方が頼うだ鹽商の損金、彼の  
 金子で濟して請取手形も剩金も一所に上した、届いたかといへば、ヲ、過分々々、慥  
 に届き請取つたが其状も請取も大事にかけ、笠の頂に入れ置く、其笠を道頓堀の群集

に、芝居の木戸に預けて餘所の笠と變つて詮議しても知れなんだ、それは失せても  
 大事ない、お蔭で萬事忝いと云へば源十郎、一段々々、それにつき清十郎奴が諸道  
 具、七十兩の小判まで、旦那が身共に預けられた、お夏女郎と清十郎奴が盗出した分  
 にして、仕てやる様な工面がなと分別すれど能はぬ智恵、其方が今度のおぞい仕様、  
 魔法でも適ふまい、如何ぞ思案はあるまいかと言へば、勘十郎頷いて、嫁入道具の代  
 銀を此方へ遣うて損を埋め、まなまと間には合せしが、一度は大阪へ上す銀、あれをと  
 胸に當て、居る工面を聞くと叫き合せて吸付ける、煙管の先にて行燈は消えて闇と  
 ぞなりにける、清十郎は幸ひと釜の内より這出づる、酒に酔ひたる源十郎、とろく  
 寝入る體なれば、勘十郎揺り起し鼻に手を當て仕濟したり、七十兩を盗み取り預人の  
 此奴に負せんものと分別し、そつと起出て源十郎を我寢處に押遣つて、夜着打被せ差  
 足し、奥の納戸に入りにけり、清十郎はそれとも知らず、さては彼奴等は寝入りしな、  
 エ、憎さも憎し逆も斯なる憂身なり、身代の敵、此首尾に助けておめくと戻られず、

勘十郎奴を刺殺し、有甲斐もなき我命仕損うたら浮世は闇、後前見えぬ出来心、内の勝手は覺の庖丁、心の錆も荒砥の研立、尋ね寄れば高野、前後も知らず不思議の本望夜着引退けて咽笛を、ぐつと剋れば源十郎、うんといふを引起し、肝先を一刀、又刺通して息を留め、耳に口を差寄せて、「こりや勘十郎、まだ魂はよも去るまじい、よつぐ聞け、朋輩に科を被せ身の爲にせし報の劔、名乗合うて殺さぬは近頃残念至極ながら」諺訴したるこの願骨、頤かけて斬下げ、此胸から企んだかと、鳩尾前を背中まで思ふ様にとりめを刺し、死骸を夜着に押包み、立上れば血落ちて滑つて仰向にどうと臥す、はつと起きて蒲團にて、足摺拭ひしづくくと、身仕舞して立つたる處に、奥よりお夏は手燭の影、表へ出づるをこれくく、ム、其處にかと走り寄り、血に滑つてア、怖と、聲を立つるを押鎮め、様子を叫き此上は、一所に退かんといふ處へ、行燈提げて勘十郎納戸の方より來る體、南無三寶人違ひ、よしこれも己が身の、火を吹消して車戸を、押明け飛んで出てにけり、遅れてお夏は詮方なく蚊帳打あげ身を潜め、

生きたる心地はなかりけり、此音に勘十郎走り寄つて手燭を上げ、夜着引捲つてヤア「源十郎が斬られたは」と呼ばはる聲に主下人、男女残らず起合せ、疑ひもなき清十郎門の戸明いたは落ちつらん、引入れあるか吟味せよと、上を下へと返せしが、なうお夏様が御坐らぬは、ヤア是ぞ曲者探して見よと「二階内藏椽の下、湯殿まで探せども蚊帳の内は氣もつかず、表の口に錠下し、裏を探さん尤もと提灯燈して駈け惑ふ、お夏は我身の恐ろしさ、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立つて散亂し、南無天照太神様、観音様氏神様、死ぬとも二人一所にと胸を騒がす折からに、勘十郎が聲として、蚊帳の内を見なんだ、探して見よといふ聲す」南無三寶と飛んで出て、表には錠下りたり、裏には大勢充滿たり、跡へも先へも因果の網の、かゝる憂身は佛神の、直なる法も横町の、間の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、懸し願の神力の神變奇特毒蛇の口、通れ出てたる如くにて落ちんと契りにしの辻、東の辻になう我夫くと、聲を限に往還り、偕は俘となりけるかと、ハヤ狂亂と鳴る鐘の、響の末にあれお夏くと

呼ぶはいの、あうく其處にか、何處にぞ、いやくいや待て暫し、あれは我屋に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ、親もゆかしや夫も戀しや、父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追駈け行かん夜は何時ぞ、鐘はいくつ八つか七つか、曉風の、辻行燈を吹消して道も心も眞暗くら、くるくくくく狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて唄ふ鶏の卵を渡る危さの、狂女となるこそ 三重哀なれ。

下之卷

お夏笠物狂

昨夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝た處、裾に清十郎とねた處エ、少くはん歌念佛観ずれば夢の世や、寝て温めし懷子、何時の間にかは浮れそめ、三界を只家として、袖笠雨の宿にも、心とどめぬ假枕、流にあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざさら、花の手おほひお手を引かれた、是も熊野の修行かや、姉様のこれの勸進柄杓の、

笑顔好しとて柳が招ぐ、柳の髪を何故に浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く何故に其方はしほが無い、節は哀に身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼、唄向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠が能く似た菅笠が、能く似た笠が、笠が能く似た菅笠がえ、笠をしるべの物狂ひ、物に狂ふも我ばかりかは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜なくを、氣違ひとてな笑ひ給ひそ、諸傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立てし、枕に残る藥恨むは道理や、それは子故の別の涙、親より子より我身より、いとし殿御のいとしぼや、それより便宜音信の、聲も聞かねば顔も見ず我は秋鹿夫を戀ひ、唄かいろと啼くと知らせたや、なうなうあれなる御僧、我殿御返してたべ、何國へ連れて行く事ぞ、男返してたべなう、いや御僧とは空目かや、我も焦るゝ丸太船、浮世渡る一節を、謠へや謠へ泡沫の、唄小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよえ、觀音薩埵の誓には、枯れたる木にも花笠、笠に挿いたは椰の葉、腰に挿いたも椰の葉、一枝二枝、三日に三枚七日に七枚、起證誓紙の牛玉の

うらなく、灰に焼きつゝ互に飲んだる水も漏さぬ中々に、引きも合せぬ神心、熊野の神のお留守かや、足柄箱根玉津島、貴船三輪の明神も、神とも覺えぬ神ならば、尋ねる人に逢はせて見や、それ／＼逢はせず逢はせぬは、皆偽の御神と、譏つても祈つても、神の力も叶はぬかと、笠も髻もかなぐり捨て、狂ひ歎くぞ哀なる、共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、我も尋ねる人ゆゑに、假に扮せし修行の道、思ひ當る事あらば、知らせ申さん國處、有様語り給へよと、嬉し人の問事や、國は播州姫路の者、尋ねる夫の容姿、姿は詞に語るとも心は筆も及びなき、ぼんじやりとして屹として、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好き梳油、鬢付髪付眞黒々、黒目勝なる目の中に、鼻筋通つて櫻色、年頃は二十歳餘、丈高からず低からず、茶の湯盤上打囉、男の藝に一つても、疵なき玉の盃の、酒も好い酒、假名文書手の萩の露、轉寢し夜の 説經陸語は、おれとそなたが中ならて、岸の濱松根掘れても、漏すまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、上越す人もなかりしに、

友朋輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名を啣ち世を憂きものに出で給ふ、今は我名を包みても何かその甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ、その人の名は清十郎、有りし姿は變るとも未だ俤は残るべし、教へて給への人々として伏沈みてぞ泣き居たる、二人の比丘尼縫り付き、さてこそは餘所ならぬ一つ流の和泉の國、その人の爲にこそ、我は妹我は娘、親の歎きを宥めかね共に亂るゝ我身ぞや、狂女といふも何故ぞ、そなたは妹背の忍草、身は兄弟を思草、同じ由縁の草葉ぞと、手に手を取つて泣き叫ぶ、物の哀をとゞめける、なう淺間しや、今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は、人を殺めし科によつて、方々へ追手かゝり、長崎とやらんにて終に捕はれ囚人となり、あの松蔭の竹垣にて七日曝し其後は、但馬屋の門口に、獄門にかけらるゝと語りしゆゑ、せめて餘所目の暇乞に、是迄は參りしが、御存じなきか、いとほしや、なに我夫は捕はれて終に首を斬らるゝとや、それは誠か、今迄は狂氣の中にも若もやと、頼む念力切れ果てゝ、同じ刀に斬られんと駈出づるを二人の尼、歎きは變らぬ我々なれど、最期に心亂

れては、人の譏後世の爲、皆其人の仇ぞとて、泣く／＼制しとむれば、ハヤ先拂の  
 警固の者、山賊夜盗のその如く厳しく堅め引出す、生きての思ひ死する罪、元一筋の  
 縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引かれ出るぞ無慘なる、矢拂の内に土壇を構へ、高  
 手を許し羽搔締め、北向に引据ゆるは目も當られぬ風情なり、お夏は涙に目も開れず  
 聲も立てねど伸上り、なう此處に居る、これ此處に顔を向けて下されと、呼ばはる聲  
 も往來の、群衆の歎き念佛に、紛れ聞えぬ哀やな、不便やな清十郎、顔も容も瘦衰へ  
 最期極る心にも、後生菩提も思はれず、お夏が歎き古郷の、親兄弟は如何ぞや、お夏  
 に知らせ今一目、せめて面影ばかりても姫路の方を見廻して、目と目をふつと見合せ  
 て、お夏はわつと泣き出す、清十郎は聲立てず、膽より出づる憂涙、刀の刃より先前  
 に、思ひに命絶えぬべし、涙を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の諺や、明清  
 十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて、生きて思ひをさ  
 しよよりも、エなまみだく、無南阿彌陀、南無阿彌陀佛なまみだく、南無阿彌陀佛

と回向して、皆々袖をぞ絞りける、清十郎涙を押へ、執れも有難き御回向、千金萬金  
 より一遍の回向に優る寶なしと承る、最期の悦び何事か是に如ん、さりながら心に  
 かゝるはこの高札、主人の金七十兩盗むとは身に取つて覺なし、相手勘十郎を斬殺さ  
 んと思ひしに、過つて人違ひ、遁るゝも業悦びならず、殺さるゝも業歎きにあらず  
 某生年二十五歳、十一歳、春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通藝能  
 文字の元末まで、人並になつたるも、皆これお主の御高恩、明暮主の教に任せ親に孝  
 行主に忠、只正直を守つて、一言も偽をいふまじしと、毎朝天道氏神を祈りしかども、若  
 き者の悲しさは、只今非業に死なんとは思ひも寄らず、佛とも法とも一遍の、念佛な  
 せし事もなく、今の口惜しさ詮方なく、高き山の嶺にて、一杯の水を求むるが如しと  
 は、此身の上知られたり、この群集の中にこそ、清十郎が一命に代らんと歎く人も  
 あるべきぞ、必々、僻事なり、存命へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ、命を助け不老  
 不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや、人々の回向を受け、佛の御國に至らんと、思へ

ばく、此世の羈絆はふつつと思ひ切つたぞや、ア、思ひ切つても切られぬは、いとし  
 可愛の只一人、假令これも夢の戯れ、頓生菩提南無阿彌陀佛と、潔くは言ひけれども  
 お夏が歎き妹の、變れる顔を尻目に向け、覺えずわつと泣き出せば、お夏を始め二人  
 の尼、警固の上下縁もなき貴賤群集に至るまで、皆々袖をぞ絞りけり、やゝあつて清  
 十郎、如何に警固の方々、口涸きて苦しきに、烟草一服所望したし、この群集のその  
 中に、姫路の人もあるならば「吸付けて給はれかし、情のお主の御手より、末期の水  
 と觀念せん、如何あらんと言ひければ、苦しからじそれ」と、烟管烟草を出しける  
 お夏悦び、なう我こそ姫路の者、一樹の蔭も他生の縁、まして一つ國なれば、未來も  
 一つに生るゝ爲約束の烟ぞと、餘所ながら暇乞、烟草吸付け垣越に、警固の者取次で  
 清十郎にぞ渡しける、夫婦は物も言ひたげに顔振上げしが咽返る、涙を中の關の戸に  
 て、とかうの詞も出てばこそ泣くより外の事はなし、漸涙を押留め、人も多きに御  
 身の手より、末期の一服を受くる事の有難さよ本望さよ、この烟草にて十惡五逆の睡を

覺し、じゅうまんごくわんにしやうりやうちうそよ 充滿吾願如清涼池と嘯きて、ぢごてがきちくしやうしゆら 地獄餓鬼畜生修羅、此四惡趣の苦患を解脱し、吹  
 出す烟は沙羅林梅檀の霞と變じ、さんぼうやくやう 三寶供養の燒香となつて、てん 三十三天に薰じ渡らば、  
じつげつ 日月は兩の眼に入代り給ひ、ほんじやくにてん 梵釋二天に手を引かれ奉り、佛の御前に此度は、立別る  
 ゝとも藻汐燒く、けぼりおな 烟は同じ鷺の山、りやうぜんじやうやま 靈山淨土で待つべきぞや、なむあみだぶつ 南無阿彌陀佛と言ふよ  
 り早く烟管押取り雁首まで、咽の内へ押込んで眞逆様にぞ伏したりける、警固の上下  
 ふためきて、それ殺すなと引起せば、色も變つて目眩めき、血は紅の瀧津瀬と、口に  
 流るゝ風情を見て、口惜や後れたり、我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の  
 情には同じ土に埋みてたべ、なむだひくわんぜおんたす 南無大悲觀世音助け給へと、立てたる拔身の鍵押取り咽  
 笛ぐつと突通す、二人の比丘尼抱き付き、なう皆様頼みますと泣けど叫べど囚人の、  
 自害に各々仰天して、いたはひこ 勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり、城下に斯と注  
 進す、だいくわんじよやくにんむま 代官所の役人馬を飛して駆來り、やらい 矢拂の内に飛んで入り、おほこゑ 大聲上げて、ヤア早  
 まつたり清十郎、なんぢはうはいげん 汝朋輩の源十郎を人違ひにて殺めし段は、はくじやうま 白狀紛れなしといへども

盗人の科未だ分明ならぬゆゑ、曝し者となして成敗の日を延し、盗人の本人露れなば  
 汝が命を助けんとの評議なりしに、近頃残念千萬なり、只今但馬屋一家を召寄する、  
 事の詮議済むまでの命を生きんと思はぬか、狼狽者と力を付け、二人が口に氣付を入  
 れ、様々看病なし給へば、お夏は少し息出づる、清十郎は心配の、臍腑を破りし長  
 烟管、頼む方なく見えにける、程なく但馬屋九左衛門手代勘十郎、一家残らずお召に  
 よつて参りたりとぞ訴ふる、斯る處へ老たる百姓、慌しく狼狽へ来て、一目見るより  
 南無三寶しなしたり、待てむざくと一人は殺さぬ、敵を取つてとらせうと、堰き來  
 る涙を押拭ひ謹んで、我らは清十郎が親、和泉の國水間の佐治右衛門、年寄ながら面  
 目なや、その勘十郎奴に瞞され、お主を大事子が可愛さ、よしない手形なんぼう後悔  
 仕る、それにつきその時分、娘子共が道頓堀にて、取違へ歸りたる笠を此頃取出せ  
 ば、頂の下にこの文あり、御詮議なされ清十郎が科を輕め下されと、涙を流して訴訟  
 する、それく是へと、取上げて披見ある、幸便に任せ一筆啓上せしめ候、此度お夏

様嫁入道具の代金百四拾兩の内百二十一兩、此處もとにて鹽問屋へ相渡し、貴様の損  
 銀残らず相濟し、則請取手形殘金十九兩上し申候、追付御下り待入候、但馬屋勘十郎  
 殿參る、同源十郎、何とこの手蹟相違なきやと仰せける、九左衛門一見して、相果し  
 源十郎が筆、判形ともに疑ひなし、サア返答あるか勘十郎、御前にて申せくと責め  
 つくれれば、勘十郎少しも怯まず、尤も我ら私商ひ、損金の流用に道具の代金、暫く  
 取換へ置きたれども、追付右の金は才覺して道具屋へ濟し置く、商賣の慣、廻金の無  
 き時は氣轉を利せ表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、  
 間に合するは世間共に手代の慣、我等ばかりに限るてなし、あの清十郎は朋輩を斬殺  
 し、金七十兩盗み取る、是も手代の慣か、エ、残多い、まそつと早う生れたら、熊坂  
 長範か石川五右衛門が手代にせば、好い給分を取らうものをと、憎體にこそ申しけれ、  
 今を最期の清十郎、眼をくわつと見開き、やい、勘十郎、廣い世界を汝が口から、  
 世間手代の慣とは、えらが過ぎて聞憎い、悪い事を慣といは、主殺し親殺し家焼強



盜世間の慣と許さうか、人を殺せば我身も死ぬる、此清十郎が七十兩や八十兩の金に換へる命でなし、旦那の御恩お夏様の情に捨てうと思ふ身を「おのれが口一つにて勘當させた其恨み、おのれを只た一討に仕舞はうと思うたに、仕損うて口惜し、エ、エ、無念な口を利かするなア、ハツ／＼我らゆゑにお夏様の自害、御恩の旦那の憎しみも無や増らん情なや、この年までの御面倒御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事これぞ黄泉の障となる、これ親父様妹どもと」呼向け顔をじろ／＼と、言度き事のありさうに、目は働けど息切に、人脈絶ゆる兩眼より、涙ばかりを暇乞、親子他人の隔なく皆々哀を催せり、佐治右衛門涙を流し申し殿様、「勘十郎がお主の銀を引負し、我らを瞞した慥な證據出づるからは、七十兩も彼奴が盗に極つた」御詮議なされ清十郎を御助け下されと、大聲上げてぞ申しける、「代官職聞き給ひ、尤々、不便なれども清十郎は、人を殺せし白狀紛れなき上は斷罪通るゝ處なし、又勘十郎が七十兩盗みしといふには證據なし、然れども勘十郎、おのれ一旦主人の金子をわだかまり、清十郎親

子に無實を言懸け迷惑させし不届、元皆おのれが悪心より事起つてお夏も自害に及びたり、主殺しとも言ひつ可し、屹度所刑に行ふべきが、手を出して人も殺さず盗人に極まる證據なければ、慈悲を以て助け置く、命の代に髪を剃し出家して、彼等が菩提を弔ふべきかと「仰せける、ハア、有難しと勘十郎頭を地につけ三拜し、小刀抜いて髻よりふつつと切つて捨てければ「ヨ、神妙々々、佛弟子となつたれば、假令眞の科ありとも、彌命は取り難し、この上は汝が行末、彼が後生の爲ぞかし、和睦して恨を晴させ、往生させよとありければ、勘十郎一念發起して、これ清十郎、今は我も懺悔せん、かの七十兩の小判は、この勘十郎坊主が盗んで源十郎奴に塗らんと思ふ折節、斬られしを幸ひに其方に負せたり」恨を晴れて成佛あれ跡弔はんといふ處を、さてこそ盗人顯はれたり其奴縛れ、承ると踏付け／＼腕捻上げ、はや斬繩にぞ掛けてける、直に國中引渡し獄門に斬りかけよと引立つれば、妄執も晴れつゝ清き清十郎、臨終顔も菩薩の數、二十五歳の命は消えて、浮名は今に残りける、お夏も共に取付くを、

宥<sup>なだ</sup>め伴<sup>ともな</sup>ひ立<sup>たち</sup>歸<sup>かへ</sup>り、その夏<sup>なつ</sup>衣<sup>ころも</sup>墨<sup>すみ</sup>染<sup>ぞめ</sup>に、年<sup>ねん</sup>忌<sup>き</sup>々<sup>々</sup>の<sup>ゝゝ</sup>手<sup>た</sup>向<sup>むけ</sup>草<sup>ぐさ</sup>、花<sup>はな</sup>の<sup>はら</sup>帽<sup>ぼうし</sup>子<sup>こ</sup>に<sup>し</sup>修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>の<sup>の</sup>笠<sup>かさ</sup>、笠<sup>かさ</sup>が<sup>よ</sup>能<sup>よ</sup>く<sup>に</sup>似<sup>に</sup>た<sup>た</sup>阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>笠<sup>がさ</sup>、彌<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>の<sup>の</sup>御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>に<sup>う</sup>ま<sup>れ</sup>ける。

# 五十年忌歌念佛

## 解 說

□寶永六年正月二日初日竹本座上演  
□作者五十七歳

### (一) 外題並に實説と稱するもの

外題に冠した『五十年忌』は、お夏清十郎の出来事のあつた時から五十年目の追善忌に當るのと、『歌念佛』と付けたのは、本曲の下巻道行に、清十郎の嫁と妹が歌比丘尼になつて姫路にやつて來ると云ふ一齣から名付けたものである。然かし又、寶永元年に大好評であつた豊竹座上演、紀の海音作『八百屋お七歌祭文』に對しての稱

であつたかも知れない。この事は後に述べる。

さて、お夏清十郎の出来事のあつたのは、寛文二寅年（實事譚）とも、又其二年前に當る萬治三子年（中興世話早見）とも云はれてゐる。要するに寛文初年の事件と見ればよい。その實説と稱するものは斯うである。

播州姫路の米問屋但馬屋九左衛門と云ふ富豪の娘お夏が、その家の手代清十郎と言ひかわして深い中となつた。両親はそれと知つて、清十郎にはそれとなく暇を遣はして追ひ出し、娘には厳しく意見し、再び間違ひのないやうにと嚴重に監視して居た。其うちにお夏は隙を窺ひ、兼て謀し合はせて清十郎と共に家を脱け出し、船便にて大阪方面へ逃げ落ちやうとするところを、忽ち追手の者に捕へられた。この時但馬屋では、折も折金子紛失の事件が湧いて出て、其嫌疑が清十郎の上に係り、主の娘をそゝのかした罪と、かたぐゝ重罪犯人と認められ、遂に死刑に處せられた。

後に殘されたお夏は、清十郎の刑死を聞いて一時發狂したが、程なく正氣に復した。然かし、いたずら娘、脱落の片割れ者と世間の惡評受け、誰れあつて養子や嫁の世話する者もなく、且つは父母世を去つて後は、殊更世上から冷たい目で見られるやうになり、程なく但馬屋の家も傾ひて没落し、お夏は遂に同國片上と云ふ地に茶店を出して、淋しい不幸な後生を過ごした。それでも七十幾歳の高齢まで存命してゐたと云ふことである。（此事は後に詳述する）

本作『五十年忌歌念佛』は、大凡以上の實説なるものと同じ經緯に脚色されてゐる。西鶴の『五人女』の經緯も大同小異であるが、但だ但馬屋九左衛門はお夏の父ではなく、兄と云ふことになつてゐる。

清十郎が處刑になつた時は二十五歳であつたらしく、お夏は此時十六歳になつてゐた。これは諸書の記載が一致してゐるから事實と見てよい。

又この刑死の年月は、前記の通り二説あるが、近松の此作の『五十年忌』と云ふ表題に由つて、假りに逆算して見ると、萬治三年と云ふことになり、即ち『中興世話早見』の所載に適合してゐる。すれば其月日は何日かと穿鑿して見ると、これも一向明瞭ではないが、『五人女』には、『哀や二十五の四月十八日に其身を失ひける』とある。或はこれが實際の日を書いたものではあるまいかとも思はれる。

## (二) 八百屋お七に比すべき情熱的なお夏の描寫

近松が筆に扱はれた數ある町娘まちぢやうの中にも、最も情熱的で、物狂はしくなる迄の死し身の戀を敢てしたお夏の如きは、餘り多くの例を見ないやうである。それは本文に描き出されたお夏の戀の、いかに熾烈であるかを見て、證據立て得られやう。

お夏は氣儘に育て上げられて來た、但馬屋の大事の箱入娘であつたが、いつしか

手代の清十郎と契つてゐた。それが爲に他所から申し入れの縁談をも、何かと苦情を言ひ立て、延び〜に期を延ばしてゐる。お夏の實の母親は室むろの津の遊女であつたから、これ幸ひと、わざと女郎の風を似せなどして、表面おもては極めてだらしのない姿體かたを装ひ、下女下男にまで女郎の種だと觸れ廻つて、嫁入口よめぐちの無いやうにと祈つてゐた。随分極端な防禦手段を執つたものである。これも清十郎に立てる心中ではあるが、一つは又天性一直線の情熱がさせる放縱なげやうな、一寸手の付けやうのない、どむならぬお嬢さん氣質かたぎの發露でもあつた。ところが父親が愆とがからかゝつた嫁取りの話が進行して、龍野たつのの富家へ嫁入ることに決定した。

但馬屋では、その嫁入の調度準備に忙しく、丁度新調の蚊帳が出来て來たので、それを座敷に釣つて、御祝儀酒宴を始めることになる。家中賑やかに悦び騒いで居るうちに、お夏は一向氣に染まない。心の中の悲しさ苦しさを、外面そとに出して氣取

られまいと、『ア、おりや風引いたさうな』とて、鼻汁打ちかんで忍び涙を紛らしてゐる。この可憐なわざとらしい一句に、十六娘の辛い悲しい戀の苦勞が、いとしばらしく入染み出てゐる、近松獨得の情味ある寫生である。

清十郎の當てこすりに泣きながら、真情を盡くして言ひ譯するところから、二人が口説の間は可なり濃艶に描かれてゐる。娘心の一圖な戀は、思ふ人の他には全く何物も見へないやうであつた、振袖と詰袖と片々に仕立て分けた女の實意を見せるあたりは、おぼこひ中にも眞剣な心中立ての純な心が映つてゐる。それと知つた清十郎が、身を擲つて嬉し泣きに泣いたのも無理ではないと思はせる。それ程に此男をと、拜む手に縋り付き『女房を拜むことかいの、これ程思ひ合ふた中、何故に夫婦になられぬ』と、辛氣泣きに泣くところ、艶冶の媚態を盡くしてゐるではないか、語は平凡にして情味は津々と溢れてゐる。斯の種の近松式標語は、後世の作者達に盛

んに流用せられて、今日では普通茶飯的の套用語と思はるゝまでに融化されてゐるのである。

悲しい差迫つた涙の中にも、流石に戀の歡樂には敏捷であつた。お夏は祝儀に釣るされてある新しい蚊帳を指して、『人の來ぬ間にあの蚊帳の開眼をせまいか』と、『こはくゝ顫ふ春風も、人目を忍ぶ緞子の蚊帳云々』のあたり、一誦艶殺妖殺の値があらう、そこへ突然手代の源十郎がやつて來る、この有様に仰天して口あんぐりと突つ立つてゐる。常は柔和なお夏も、いざとなつては男子も及ばぬ大膽さを發揮する。蚊帳の密會を源十郎に見付けられた時、清十郎は驚いてお夏の棲を引つ被ぐと、お夏は騒がず袖で蔽ふて、源十郎に向つてそも何と言ふたか、『コレ源十郎其方も男ぢや引かせはせぬ、忍んで逢ふは清十郎、見遁しにして給らぬか、沙汰するならばと云や、幸ひ刃物も此處にある、すぐに二人が死ぬるまで、サア助けてたもるか

殺しやるか』と、悪怖れもせず屹とした態度で詰めかけた。この度胸の据つた強さはやがて情熱的な純真な娘心のさせる強さである。お夏は思ひがけない此危機にぶつかつて、其本質の熾烈な熱情が殻を破つて迸り、身も心も天も地も焼き盡くす可き情焰が、この一句となつて燃え出したのである。

清十郎は不義の密會が露顯し、其上に、金子の嫌疑懸けられて、追放と云ふことになり、奉公始めの時の布子に着せ換へられ屋外へ追ひ出される。暫しの別れも悲しく思ふお夏は、自分の小袖と男の布子とを換へ着して、又逢ふまでの形見にしやうと、互に帯を解き身を合はせて、片袖づつを脱ぎ換はず、肌睦じき志、戀路ならずば何故に云々の状景、情緒纏綿たるものがある。

斯うしたお夏は、清十郎が圖らずも殺人の罪を犯したことから、いよく出奔と心を極めるうち、家内は上を下へと騒ぎ出した、人殺し〜と叫ぶ聲、お夏様が見

へぬ〜と云ふ人聲。お夏は男の身の氣遣はしさ、我が身の上の恐ろしさに、氣は逆上して心は亂れ、表へ走れば戸には錠が卸りてゐる、裏口に戻れば大勢が群り立つ氣配がする。進退谷つたが、こゝぞ女の一念、猛然として間の細路次蹴破ると、身は戸外に轉げ出た。この恐ろしい大力の湧いて出ると同時に、お夏は最早平常の人ではなかつた、彼が斯くして狂女の態に移つて行く徑路は、どこまでも同情の涙で見ねばならぬやうに描き作されてゐる。

下卷、刑場にて、清十郎は處刑の際に、此世の思ひ出に煙草一服を所望する。役人の情で許されると、群衆の中のお夏は直ぐ煙草を吸付けて出した。それと見て知つた清十郎は、これに上超す満足はないと、その煙管を押取て我が咽に押込み、眞逆様にひれ伏して自害する。血が瀧のやうに口に流れ出る有様を見て、口惜や後れたり、我れこそ清十郎が二世の妻、但馬屋のお夏、人々の情には同じ士に埋みてた

べ、南無大悲觀世音助け給へ」と、立てかけた抜身の鎗で咽笛を刺し通す條がある。お夏は、役人を始め多くの群集を前にして、この國家の大罪人を指し、「我れこそ清十郎が二世の妻」と公言し、恥辱とも思はねば、又恐ろしいとも思はなかつた。只々夫の愛にのみ生きてゐるお夏の目には、國法もなく罪人もなかつた。純眞な愛、熾烈な情熱は、畢竟お夏の全生命であつたことは、斯の如く一貫して作者の筆に描かれてゐる。

この作より數年前、豊竹座の作者紀の海音は、江戸で名高い八百屋お七の事件を『八百屋お七歌祭文』に描いて、火あぶりの戀の緋鹿の子に滿都の男女を艶殺した。この戯曲としての好材料である八百屋お七の情話も、既に海音等の手にかゝつた以上、決して再用しなかつたと云ふ近松は。表面は左様であつたかも知れぬが、内實にはお七（海音のではない）を扮本にして此お夏を描いたのではあるまいかと思はれる。

る。斯うした例は近松の他の作にも尠くはない。そして『歌念佛』を題名に置いたのも、或は海音の『歌祭文』に對しての何かの謎ではなかつたかとも想像されやう。

### (三) 大阪川口的情景、田舎者と惡漢

泉州水間村の百性佐治右衛門（清十郎の父親）が、娘と嫁とを連れて、大阪へ出てくる。娘と嫁とは大阪珍らしく、道頓堀を手始めに大阪名所を見てまはる、親爺は一人川口の便船で待つてゐる。夕暮になつても女共は歸つて來ない、親爺は苦を上げて心配そうに眺めてゐると、急ぎ足でいきせき二人は戻つて來る……これが上卷劈頭の描寫である。其處で親爺が娘等に大阪見聞を話す條に、「昨夜も東の横堀で男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たを、幾組か見て來た、抜になりしやら、錢をついたも慥に見た、大阪の喧嘩は大方相場は極つて、十文では

事がすむ云々と、東横堀の濱に立つ十文色(淫賣婦)のことを、眞面目に見て話してゐる。娘等は「今日も一日芝居を観て、それから此處の川口八景とやら見物して云々」と答へてゐる。この條の本文、いか様にも大阪川口の船着場の光景から、泉州の奥の田舎親爺や、鄙の娘たちの有様が目に映るやうに描かれてゐる。

この田舎の好老爺が、但馬屋の悪手代勘十郎にうまくと騙られ、證文に印判据へるあたりは、今も昔も變りのない、都會の船着場や停車場で多く見受ける、仕事師對上りさんの悲喜劇であつて、古今一軌の世相であつた。作者はいつも斯うした現實の取材に、他の企及し得ない獨創の手腕を有つてゐた。(以上、上卷)

#### (四) 蚊帳の祝儀、近松式の下文、夜の商家の臺所

嫁入道具の一つである蚊帳が、新に調製されてくると、その祝儀とあつて之れを

釣り、酒宴など催す慣習があつた。蚊帳は嫁入調度のうちでも重要品になつてゐたからである。この蚊帳の祝儀と云ふ一慣例を捉へて來て、この蚊帳から意外な騒動を生み出すことに活用してゐる。嫁入蚊帳の中から密會の男女を出すなどは色氣のある好趣向ではないか。

近松が常に用ひたがる色好みの、おしやれの下女が、この場にも一寸その滑稽な顔を見せてゐる。いつもの通りの型で軽い下卑た身振で、見物の失笑を買ふてゐる。而かもこれが無駄に使つてはゐないので、一種の緩和劑として場面の調節を計つてゐた。そして又、實際大阪町家には、この種の好色下女が尠くはなかつた。畢竟閉戸主義の大家生活から湧いて出る蛆(うじ)の一種で、その家一つを城廓と結界し、他の男の出入を禁じたのだもの、百のお夏や千のお玉(下女)が湧いて出る筈であらう。作者はこの現實に觀て、己が作中に收めたのであること、例の如してある。



但馬屋の悪手代、勘十郎源十郎の二人が、ほろ酔機嫌で臺所の蒲團の中に潜り込み、頬杖しながら行燈の下、寝ながら煙草吹かしかけ、悪企みの段々を、ひそ／＼話し合ふ邊は、情景共に活きた夜の商家の臺所の一面を、寫生したものである。こんな狡猾な黒鼠が、多く夜の舞臺を利用して、悪事の脚色を書くこと云ふ事は、いかにも有り得べき事實だと思はしめる。(以上、中卷)

(五) 『お夏笠物狂ひ』の小唄と大岡政談式解決

『お夏笠物狂ひ』の景事は、狂女お夏と歌比丘尼二人(清十郎の妹と嫁)とを配しての振事である。

この景事の中には種々の節調が採り入れてあつて、歌念佛もあれば説教もあり、謠曲がかりのところもある。殊に流行の小唄の類が、組歌式に綴り合はせられてゐ

るのに興味を引く。根が狂亂曲だけに此等の採り入れ方に付ても、餘程自由の趣が見へてゐる。中にも世に名高い小唄では、左の數首が目につれる。

□夜さ來いと云ふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝たところ。(作者の『重井筒』にも引用)

□向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た菅笠が。(西鶴の『好色五人女』にもある)

□清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよゝりも。(同上にある)

□小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に船を押さしよ。

□笠に插いたは椰の葉、腰に插いたは椰の葉。(投げ節の本歌、熊野權現詣りの道者が唄ふたものだ云ふ)

□七や十四五すつとん／＼。(小唄『かるやま』中の文句、本文頭註参照)

この外、古歌や古詩などの引用轉用は例の通り。

大詰、刑場の後段になると、やゝだれ氣味も見へぬてはないが、但だ事件の解決を、彼の大岡政談に見るやうな、機智で以て裁斷するあたりは、作者としては、いさゝか珍らしい手法であつた。但馬屋の金子紛失事件に付て、清十郎の冤罪を晴らすため、泉州の親佐治右衛門と、悪手代勘十郎との對決となる。勘十郎は非を理に言ひくろめて一旦無罪と云ふことに決する、勘十郎は嬉しさの餘り、思はず己が罪狀を告白する。さてこそ盜賊でござんなれ、其奴縛れと一令の下に捕縛されると云ふ、棟悦びの滑稽な大詰になつてゐる。(以上、下卷)

### (六) 目に觸れた佳句巧趣

本作劈頭の序詞『通ひ車は小町が仇の情に乘せられ云々』の一節は、古來著名な戀

に關する記念品の展覽を観るやうである。即ち書き並べた品種を見ると、深草の少將が小町の許へ通ふた通ひ車。次は、班女が閨の扇。在原行平が須磨の浦に残した形見の烏帽子。源氏若菜の柏木と女三の宮との戀を繋いだ猫の鞠。花人親王が牛飼山路と身を忍んでの戀物語にある草刈笛。孰れも名高い逸品揃ひである。そして最後に、お夏清十郎浮名の菅笠と云ふ、横網格の珍品が控へてゐた。

本作を瞥見して、名文佳句と云つたものゝ、主要な二三を左に掲げて見やう。

お夏と清十郎が、蚊帳の祝儀日に、祝ひの蚊帳の中で密會するくだりの文は、前言ふ通り艶美を盡くしたものである。『あの蚊帳の開眼をせまいか』とお夏は云ふ、蚊帳の開眼とは意味深長な面白い造語である。『こはく／＼顫ふ春風も、人目を忍ぶ緞子の蚊帳、蚊帳はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手かと戯れかはす手枕も、心せはしき契なり』は、艶殺、妖殺！

其處へ偶然來合はせた手代源十郎、此有様を見て驚き呆れた形容を、『はつと廣げし手も打たれず、呆れて立てば云々』と云つてゐる。呆れ驚いた表情を、『はつと廣げし手も打たれず』と、動作を以て表現させた描寫法は活きて見へた。同時に舞臺の人形の動作にも、據るところを示してゐた。

清十郎は、這出の時の破れ布子一枚の、着のみ着のまゝで大道へ追ひ出される條「まだ如月の朧夜や涅槃の雪の名残の門云々」は、作者が例の俳諧調行文の一例である。

清十郎は追ひ出された門の外に、お夏は若しやと門の戸明けて忍んで出る。二人は計らず顔見合せ、オ、と計り抱き合ひ、『聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰付きて忍び音に泣くばかりなり』とある。この二人が必死となつて抱き合ひ忍び泣くと云ふ姿態を、『肩の縫目に喰付く』と繪畫的に形容して、一面人形の動作を暗に説明し

てゐる行き方は、作者獨創の形式で、その一例は『心中萬年草』のお梅桑之助心中の條にも見へてゐる。(その項下にて説いて置いた)

清十郎とお夏の蚊帳の密會が露見し、清十郎はすぐくと、蚊帳の中に小さくなつて踞つてゐる、その姿を譬へて、『晝の螢の影消えて籠にやつる、其風情』と叙べ、『外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣き盡くす』と受けたのは、好比喻と云つてよい。

お夏は清十郎と別れるに際して、暫しの名残も惜いとて、自分の小袖と男の布子とを脱ぎ換へ形見にしたいと。涙ながらに互に帯を解き合ひ、座りながら互の身を合はせて、片袖づつ脱ぎ換はして着換えると云ふ趣向は、甚だ情味のある意匠で、人形の舞臺面を想像する時、實に可憐な好畫面が描き出されたこと、思はれる。若しこれが生きた俳優の演技であつたら、逆も正面に觀られないほど肉感的であつたであらうに。(以上凡て中卷)

これは筆の序ついでに加記するが、本曲の最後にある文章、「お夏も共に取付くを、宥ただめ  
伴なひ立歸り、その夏衣墨染なつごろもに、年忌としごのくの手向草云々」とあるは、お夏が生き残り  
て尼生活に入り、永く清十郎の菩提を弔ふたと云ふ實説を仄ほのかかしたものである。

(七) 風俗習慣その他参考資料

例により、本文に描かれた風俗習慣その他の参考資料を左に掲げる。

- 大阪川口船着場ふなづきばの光景……………(解説第三項に記述)
- 十文……………惣嫁の揚代十文もん、又十文色もんいろ(賣春婦)の名がある。(同上)
- 嫁入蚊帳の祝儀……………(同第四項に記述)
- 流行小唄のいろ……………(同第五項に記述)
- 川口八景……………當時川口(安治川口)船着場の繁昌に、佳景八勝を選んで川口八

景と稱したものらしい。(本文上卷)

- 暇ひまを出される雇人……………何か失策があつて暇を出される雇人は、初奉公の時(這こ出と云ふ)の布子と着せ換へられ投り出される慣例になつてゐる。それがたとへ中老以上の年齢としの者でも、小丁稚の時の布子と着換へさせられた。(本文中卷  
参照)

- 辻行燈……………辻番所備付けの行燈。(同上)
- 歌念佛のこと……………本文下卷に歌念佛の文句がある、「観みずれば夢の世や、寢ねて  
あたくめし懐子なごころこ、何時いつの間にかは浮れそめ云々」は、参考の一資料。(本文下卷  
「お夏笠物狂ひ」参看)
- びんざさら……………歌念佛の拍子にも用ひた器、詳しくは前に説ひて置いた。(同  
上)

□勸進柄杓……勸進の錢米などを受ける柄杓。(同上)

□歌比丘尼……地獄極樂を繪解きした巻物など持ち、説教に歌調を用ひた比丘尼のこと、後には一種の賣色女となつた。(同上)

### (八) 作の系統

お夏清十郎の情話を書いたものでは、西鶴の『五人女』などは随分古いものであるが、その五人女の文中に、『其頃は上方狂言になし、遠國村々里々まで二人が名を流しける』とあるからは、『五人女』以前、即ち本作『歌念佛』以前には、既に『歌舞伎狂言にも仕組まれ、小唄にも歌はれなどして餘程流行したものと見へる、(この小唄の重なるものは前述の通り)。其一例は『實事譚』中に、青木鷲水が當時の小唄を集めた『吉日鑑會我』(寶永七年版)に、『向ひ通るは清十郎ぢやないかいの、ヨイ〜笠がよ

く似た、菅の小笠がさりとほゑいやらゑいそりやサアゑいやらゑい、笠が似たとて清十郎であらばいのヨイ〜。お伊勢参りは、皆清十郎か、さりとほゑいやらゑいとある通りである。又此浮名の世に甚だ高く聞こえたに付ての、珍しい證例は。この情話が雲上にまで響いたと見へ、靈元上皇は、子規たごいと云ふ句題に對して、『清十郎聽け、夏が来て啼く時鳥』と遊ばされたと云ふことである。(これに付て、上皇對近松に關する私見もあるが茲には省く。)

さて、淨瑠璃曲に綴られた最初はと云ふと、一向不明になつてゐるが、外題年鑑の記載によると、宇治加賀掾正本に『お夏清十郎歌念佛』の外題が見える。或は、近松の本作の舊名か、又は全然別の作か、若しくは本作より前年の作か後年の作か、それも正本を見ぬから分らない。外には、竹本座の寶永二年十一月興行に、前『木曾軍記』切『お夏清十郎笠物狂』作者未詳と云ふのがある。同六年には即ち本作『五十年

忌歌念佛」が現はれてゐる。其後、享保十六年四月初日、竹本座上演、並木宗輔安田蛙文合作「和泉國浮名溜池」が書かれた。次に安永七年十二月廿一日北堀江座上場「夏浴衣清十郎染」が、菅專助豊春助の合作で出来た。今日専ら演ぜられてゐる、「壽連理松」湊町の段は、作者不詳の一幕物らしいが、随分ゴタ／＼した脚色のものである。

その他、半太夫節の「お夏笠物狂」、一中節の「お夏清十郎沖中川」、常磐津の「亂咲縁花笠」、富本の「最迫戀男容」など、外に「笠物狂」は種々の俗曲に綴られて、随分と其數は多い。

戯作物には、柳亭種彦の「縁結月下の菊」が世に知られてゐる。文化文政の頃に至ると、讀み本草紙の類に、多々益々取材されてゐる。

以上のうち、淨瑠璃系のもものは、主として近松の本作を扮本に採つてゐることは

勿論である。

(九) お夏醜婦説と其晩年の生活

これは本作とは直接の関係はないが附記して置く。

夕霧太夫がすが目だとか、酒屋のおそのがちんばだとか、菊酒屋のお菊があばただとか云ふ如く、お夏も決して美人ではなく、お菊同様のあばた顔であつたとも云はれてゐる。兎に角醜婦であるとの一説は、西澤一風の「亂脛二本槍」(享保三年版)の所載である。此書中、作州津山の家中小出重左衛門が、己が妻おしゆんを奪ふて脱落した倉橋藤九良の跡を追ふて、備前國片上に来り、辻堂に憩ふうち、往來の馬士の高話し、おしゆん藤九良の噂のつひて、兎角美人と云はるゝ者は、さまざまの事を惹き起すとして、話は枝葉に亘つて、但馬屋お夏の身の上に及んでゐる。左にそ

の一節を轉載する。

……然かしさうも云はれぬ、ぶきりやうても片上のお夏を見よ、あれこそ日本に名を流せし、播州姫路但馬屋お夏がなれのはて、……清十郎は首を刎ねられお夏はいたづら者と浮名立ち、嫁入りの口なく、二人の親はころりさんしやうみそ、兄弟なければ誰れとりあぐる人もなき涙、身すがら此片上へ引こし、生れながらの後家となり、茶店を出して旅人の足をやすめ、茶のぜに取つて渡世とす、常座はお夏が茶屋ともてはやせしが、次第につむりの雪山をなし、した地の悪女に寄る年の、ひたいの皺もより來るや、行くもくるもわき目して立寄るものなし……重左衛門彼等が話をつくく聞き、今語りし但馬屋お夏ことは、國元までも風聞の女、道筋なれば立寄らんと、互に語るうち、片上かたがみにつきたり、こゝよそこよと見るうちに、但馬屋といへる書きつけ、まづ休まんと床几に腰をかくれば、

七十ばかりの老女、あるほど腰をかゝめ、旅人茶をまわれとさし出す手、わしくまたかの如し、湯行水もいつしたやら知れず、あたまに油つけず、櫛のは入れねば鼠の巢にひとし、そなたは姫路のお夏とやらか、老女興さめたる顔ふり上げ、たび人は何を言はします、それは昔々の名、今更聞くらめしと少し恥づる顔、そらづ川のらばより釣り取る俤、人間世にある時ぞかし、さしも名高きお夏も、寄る年のつれなく斯くまで衰ふものか云々。

以上は作者西澤一風が、實見談を挿入したものと云はれてゐる。

それに付けても、女優松井須磨子は、好い時期に死んだものだと、ふとそんな事が頭に浮かんだ。

(十) 泉州水間寺愛染堂情死の異説

泉州岸和田城の鬼門除けとして名高い水間寺(南海電車線貝塚驛より東五十丁)にお夏清十郎情死の傳説がある。その水間観音寺の境内に愛染堂がある、堂前に大きな椿がある、其下で二人は刺し違へて情死したので、今も泉州邊の流行小唄に「お夏清十郎の愛染椿、縁を結ぶの玉椿」と云ふのがあるさうである。尙ほ寺の持物には情死に用ひた短刀やお夏の小袖が保存され、又お夏の家筋が今に續いて居て、其家には代々美人を産み出すなどと云ふ話である。近松の本作にも、清十郎の親里を泉州水間村と書いてあり、並木宗輔の『和泉國浮名溜池』にも清十郎の生家水間村の一段がある。何か其間に關聯の糸が繋がつて居るのではあるまいかと、この疑問を晴らす爲め、實地踏査に出かけたことがある。

いかにも水間寺には、愛染堂があり椿(小木)があり、小袖のやうなものもあり、短刀(但し新刀)もあつた、又、お夏清十郎の塚と稱する(實は無縁の古墳)ものもあ

つた、お夏の家筋と云ふ農家をも訪ふて見た、寺の記録も探つて見た……要するに、水間寺のお夏清十郎は、姫路但馬屋の事件とは全く關係のない、異つた別の情話であることが判つたその實説と云ふは斯うであつた。

水間寺の観音は、岸和田城の鬼門除けに鎮座あるので、城主の渴仰厚かつた。清十郎と云ふは同藩のお小性で、常に殿の御代參として參詣したが、ふと同村の百姓楠右衛門の娘お夏と云ふ美女と馴れ染めた。清十郎は其後仔細あつて、岸和田を去らねばならぬ事になる。お夏とても身分の違ふた戀の、末遂げられぬ因果をはかなくて、遂に二人は、嘗て初戀を語り合ふた愛染堂の椿の下で、刺し違へて情死を遂げた。この憐れな物語が千代八千代の玉椿の匂ひと流れて、「お夏清十郎の愛染椿縁を結ぶの玉椿」と三百年來の童謡にまで唄ひ惜まれてゐる所以であると。

それにしても、お夏と云ひ清十郎と云ふ名が、偶然にも一致してゐるのが奇妙と



云へば云へやう。又、近松が本作中に、清十郎の實家を水間村とし、並木宗輔も水間村の一場を書いてゐるのが、更に奇妙と思はれぬでもない。或は思ふに、愛染堂の情死は事實としても、果して夏と云ひ清十郎と云つた男女であつたか如何であつたか。當時姫路の二人の噂が高かつたため、其名を利用して參詣人吸集策に用ひたのてはあるまいか（水間寺が斯うした商略？に長じてゐた事は、西鶴の『永代藏』の『泉州水間寺利生の錢』に其證例がある）。又近松が水間村を持ち出したのは、當時大阪では神佛中の流行兒（はやりっこ）として大に持て囃された水間觀音の事であるから、例の際物として利用したに過ぎないのかも知れぬ。並木宗輔の水間村の段を書いたのは單に近松型を襲踏したまでの事と、斯う考へれば別に不思議でも奇妙でもない。

## 大近松全集 第十一卷（終）

大正十二年二月廿六日印刷  
大正十二年二月廿八日發行

非賣品



大近松全集  
第十卷  
附 奥

著者 木谷正之助

發行者 東京市神田區表神保町十番地 國松

印刷者 東京市芝區南佐久間町二丁目十番地 遠藤廉治

印刷所 東京市芝區南佐久間町二丁目十番地 安全印刷株式會社

發行所

東京市神田區表神保町十文雅堂内  
振替東京四〇五二四番

大近松全集刊行會

者 作 製 書 本

裝 幀 者 藤 井 達 吉 氏  
撮 影 者 石 津 月 舟 氏  
彫 刻 者 山 岸 主 計 氏  
木 版 摺 者 西 村 熊 吉 氏  
製 版 及 印 刷 者 安 全 印 刷 株 式 會 社  
製 本 者 長 澤 長 平 氏  
用 紙 王 子 製 紙 株 式 會 社

505  
36

終